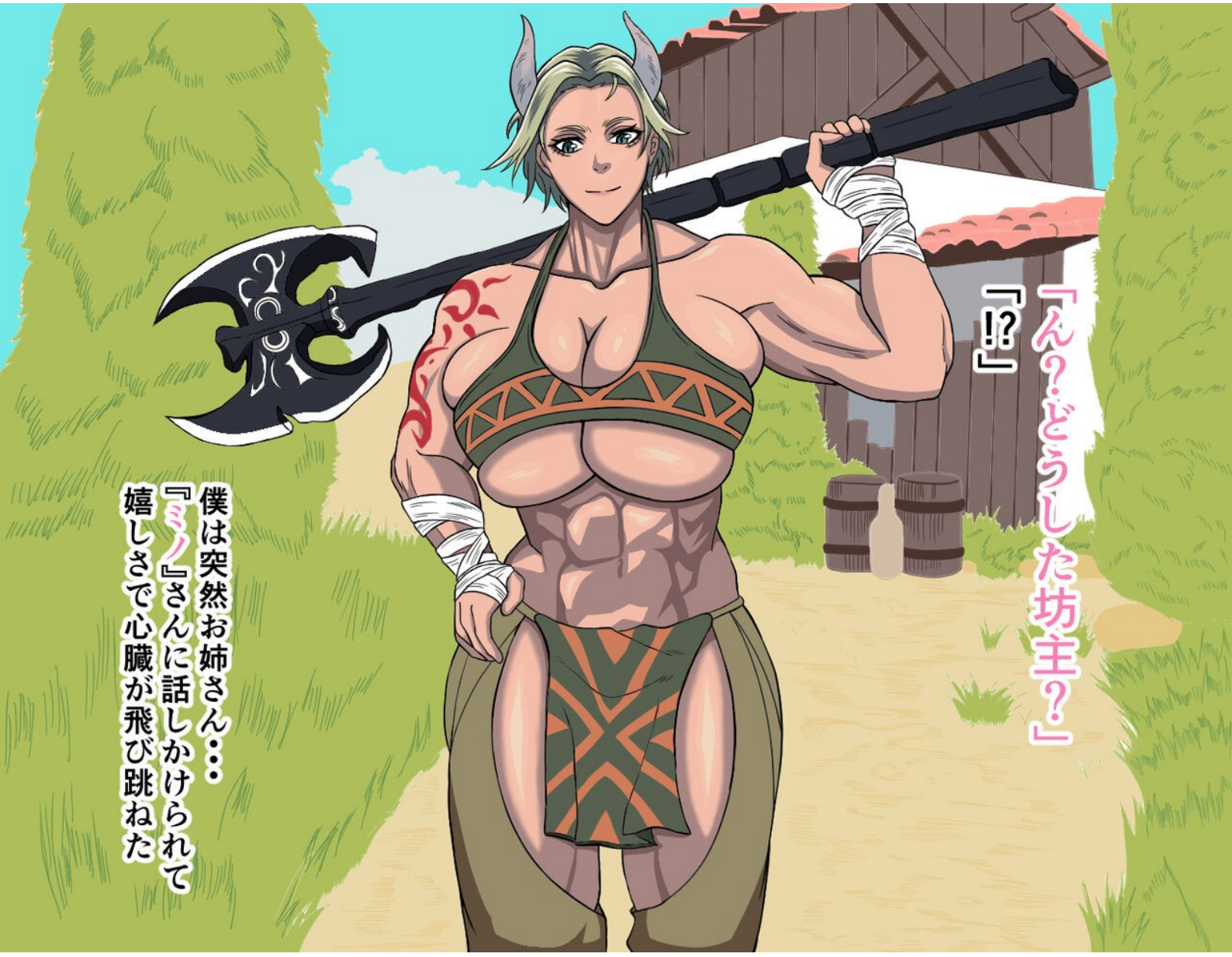
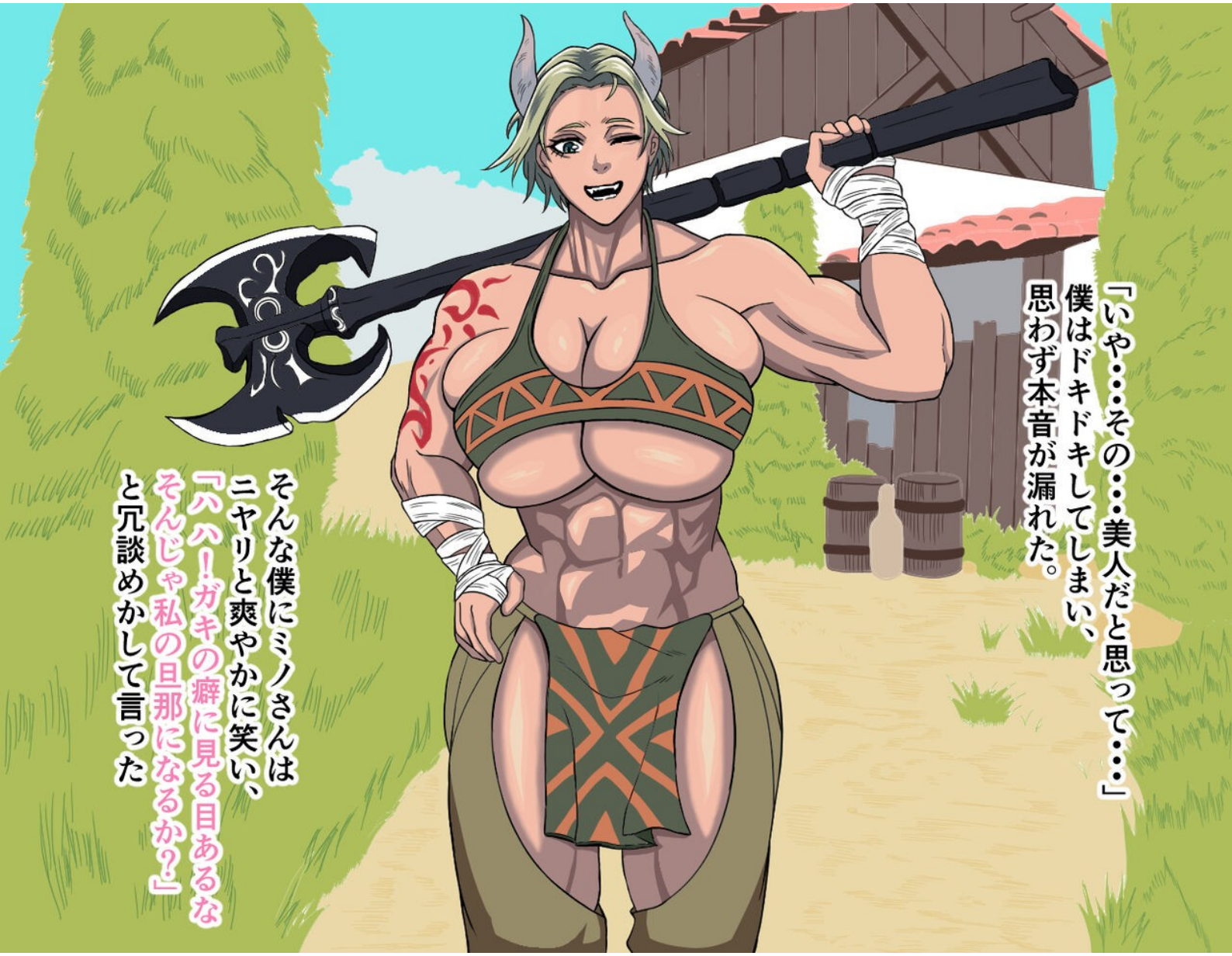
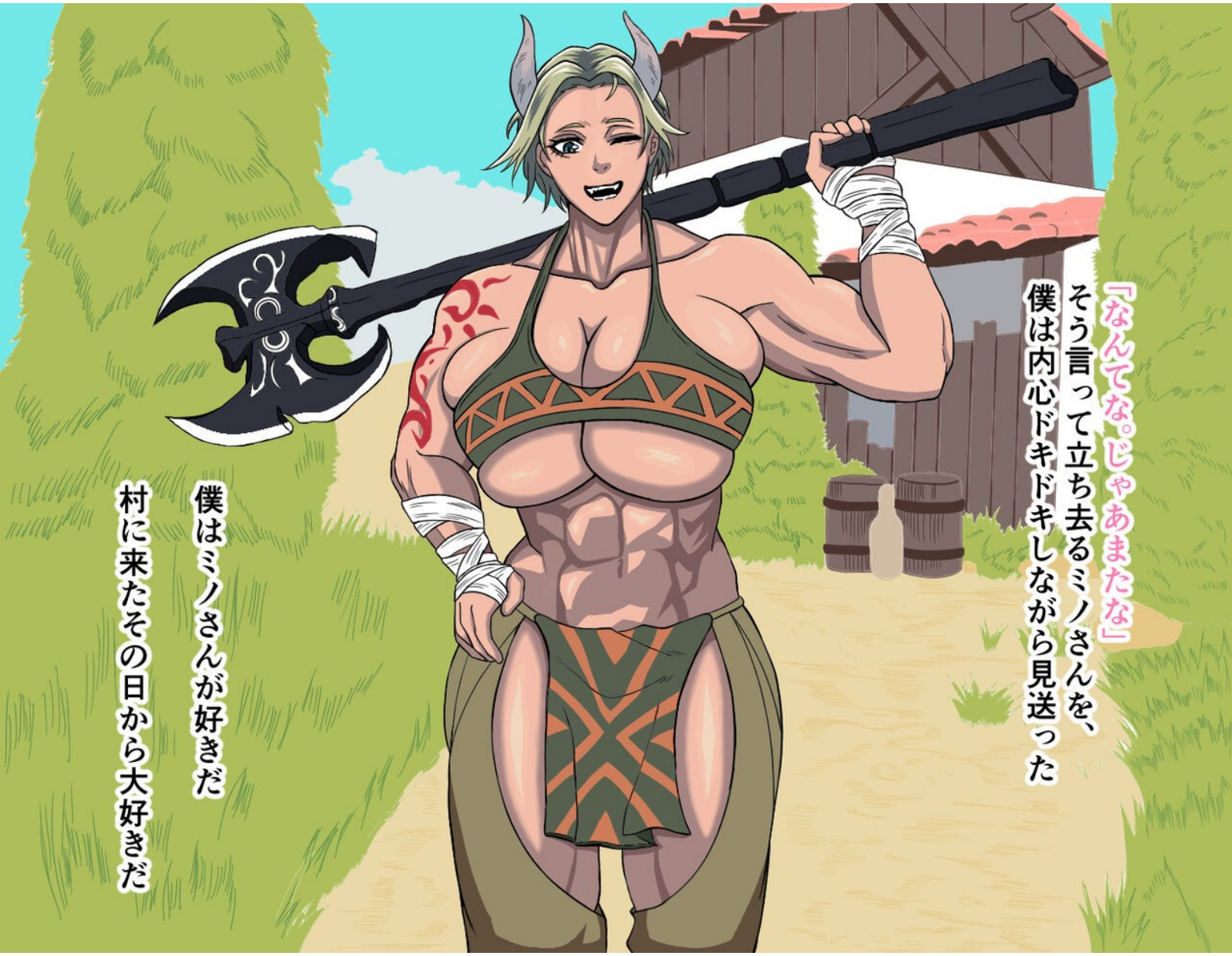
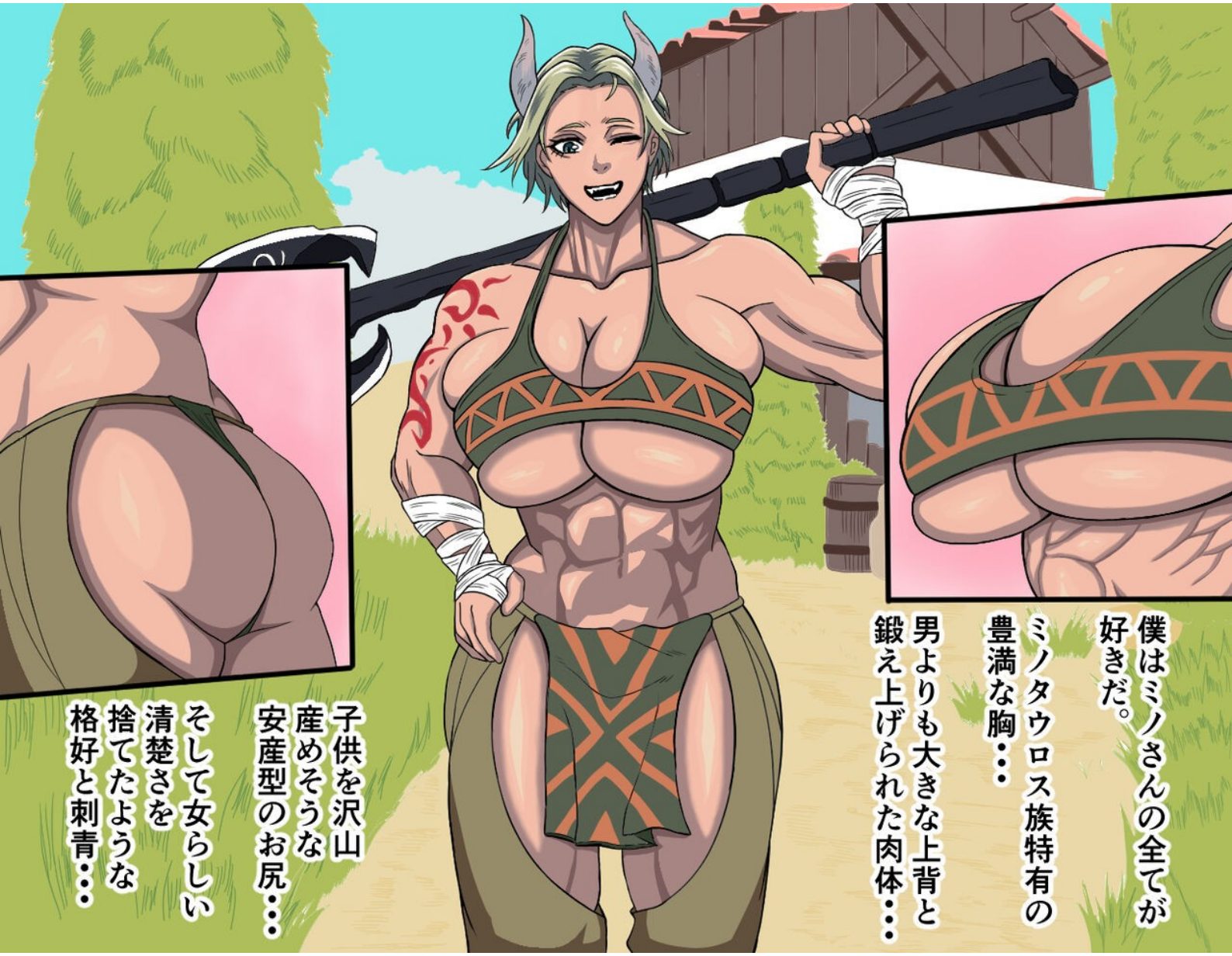
爆乳筋肉長身女を
チート道具で
ママにする!!
絶倫鬼畜
ショタに
好き放題される
お姉さん

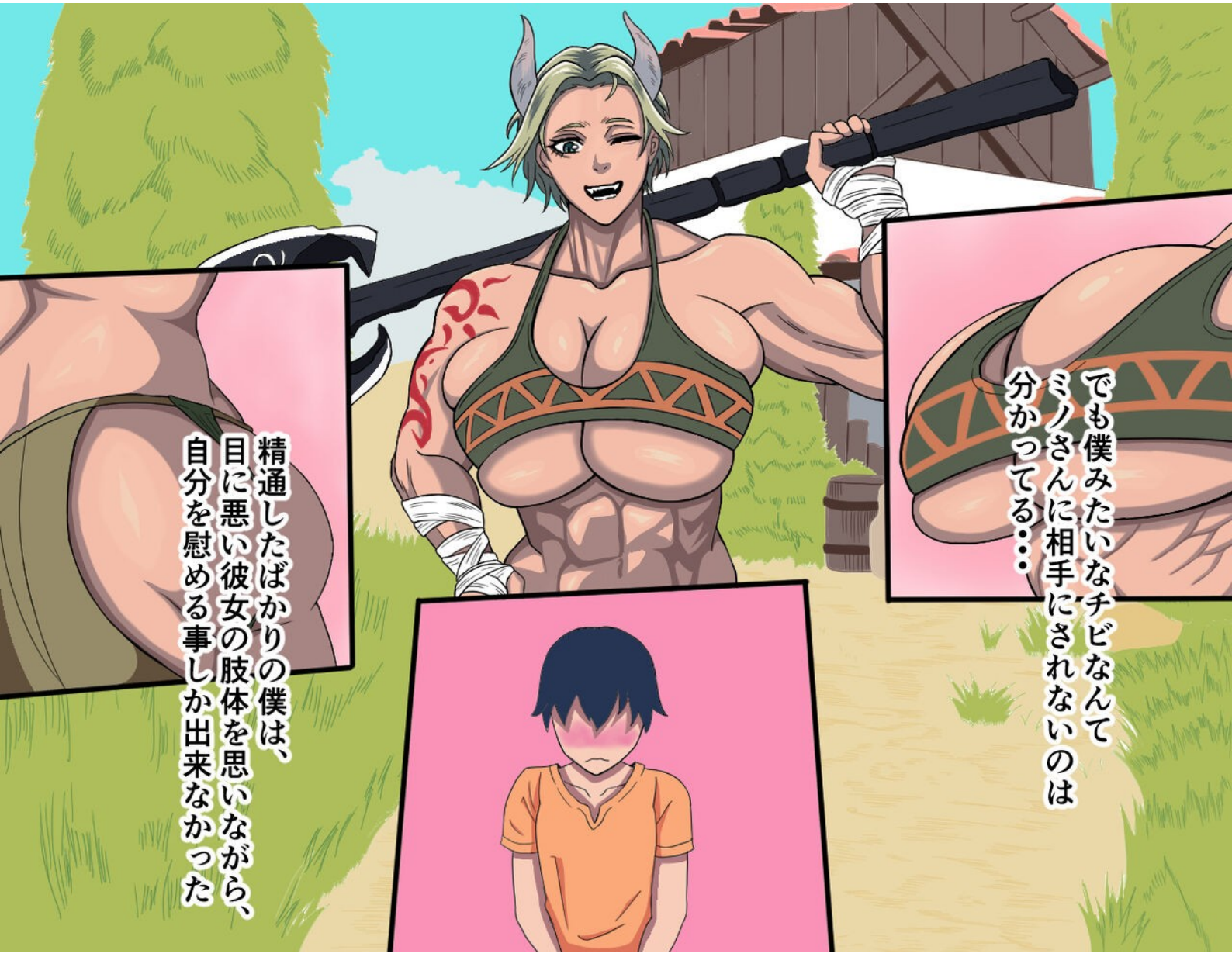
最近村の外れに越してきた
冒険者のお姉さん
彼女は村の近くの魔物を
駆除するために雇われており、
大斧を軽々振るう姿は
とても頼もしい
その仕事ぶりと、
快活で豪快な性格から、
男女問わず人気がある

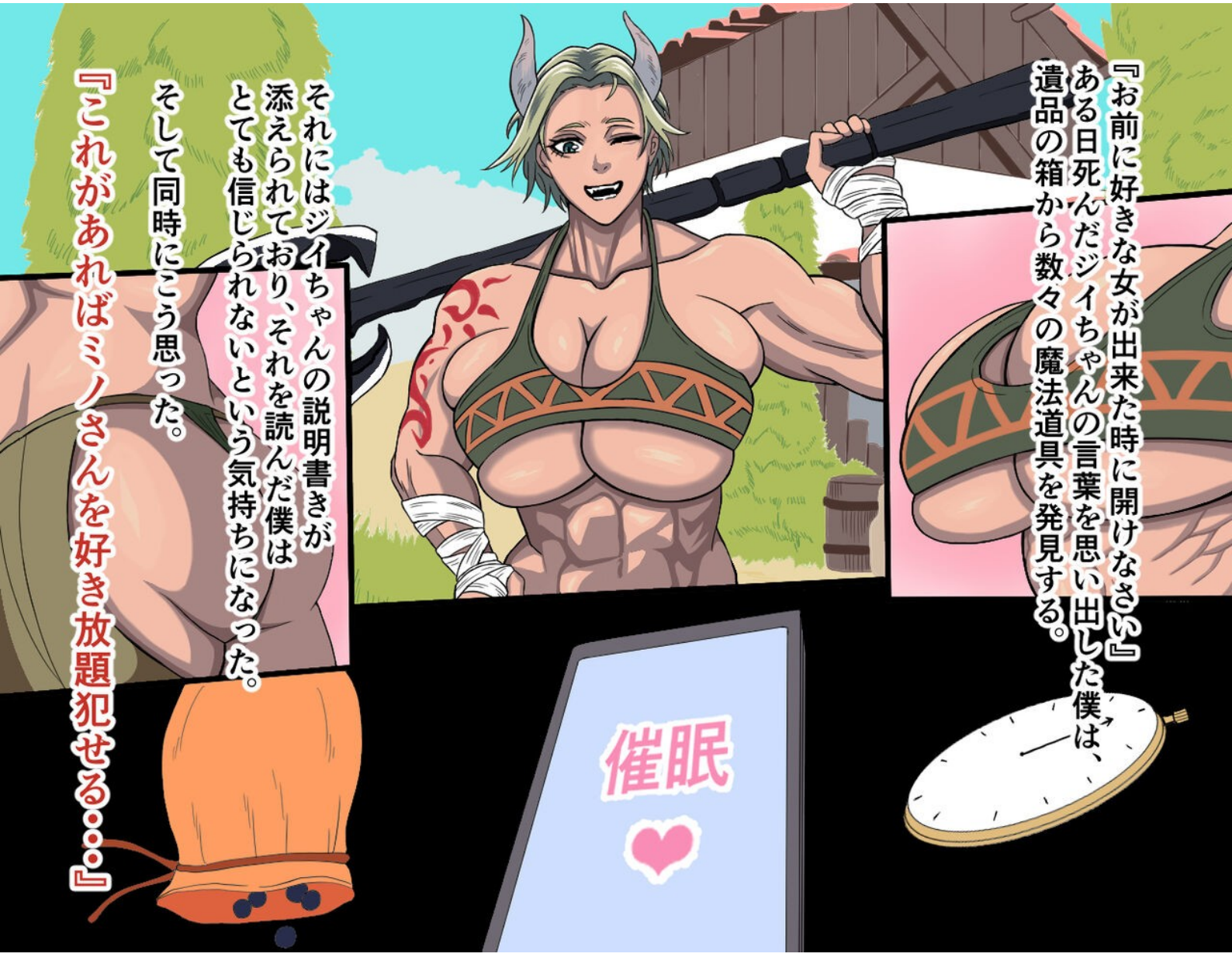

「ん？どうした坊主？」
「!?」
僕は突然お姉さん・・・
『ミノ』さんに話しかけられて
嬉しさで心臓が飛び跳ねた

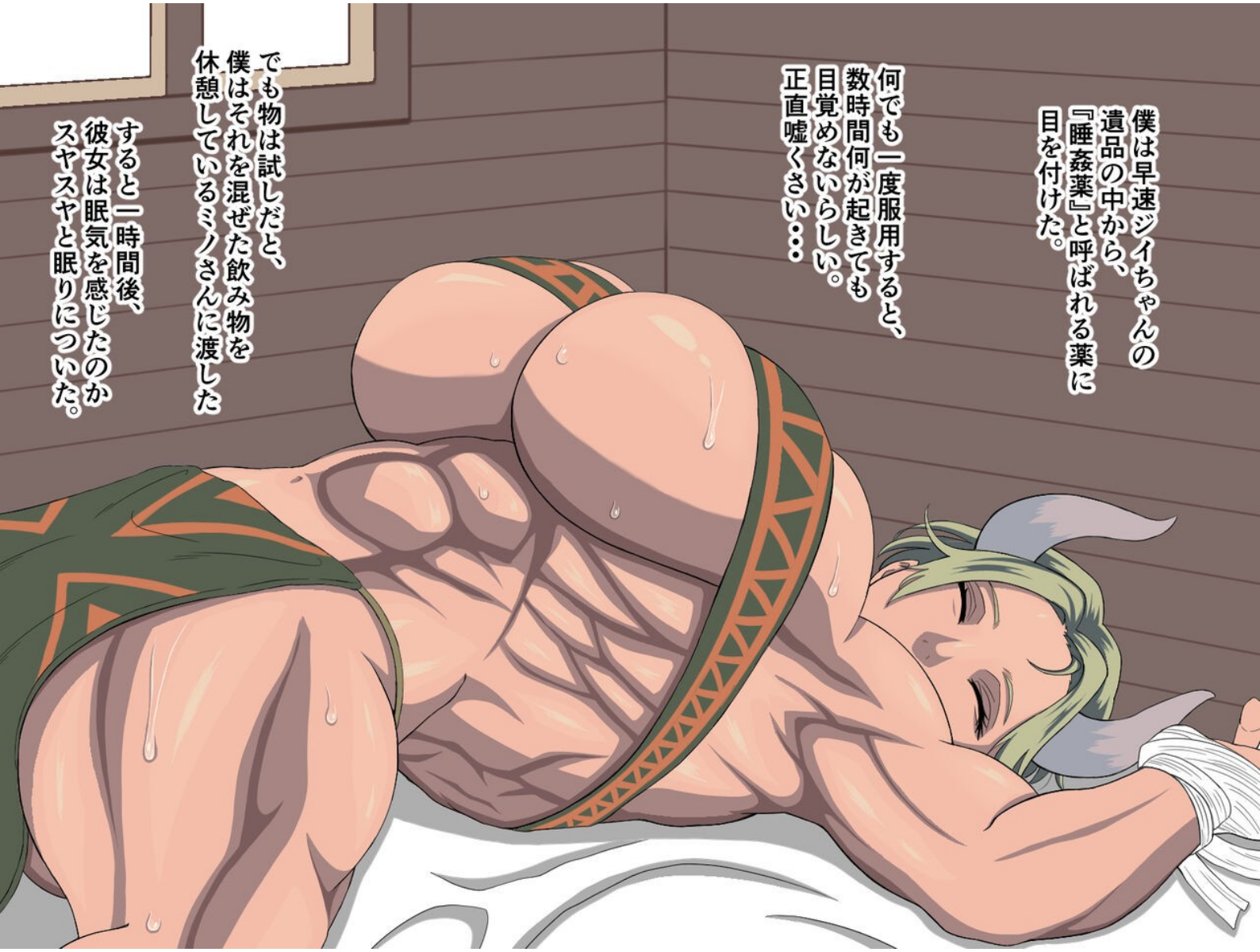

「いや・・・その・・・美人だと思って・・・」
僕はドキドキしてしまい、
思わず本音が漏れた。
そんな僕にミノさんは
ニヤリと爽やかに笑い、
「ハハー！ガキの癖に見る目あるな
そんじゃ私の旦那になるか？」
と冗談めかして言った


「なんてな。じゃあまたな」
そう言って立ち去るミノさんを、
僕は内心ドキドキしながら見送った
僕はミノさんが好きだ
村に来たその日から大好きだ


僕はミノさんの全てが好きだ。
ミノタウロス族特有の豊満な胸・・・
男よりも大きな上背と鍛え上げられた肉体・・・
子供を沢山産めそうな安産型のお尻・・・
そして女らしい清楚さを捨てたような格好と刺青・・・

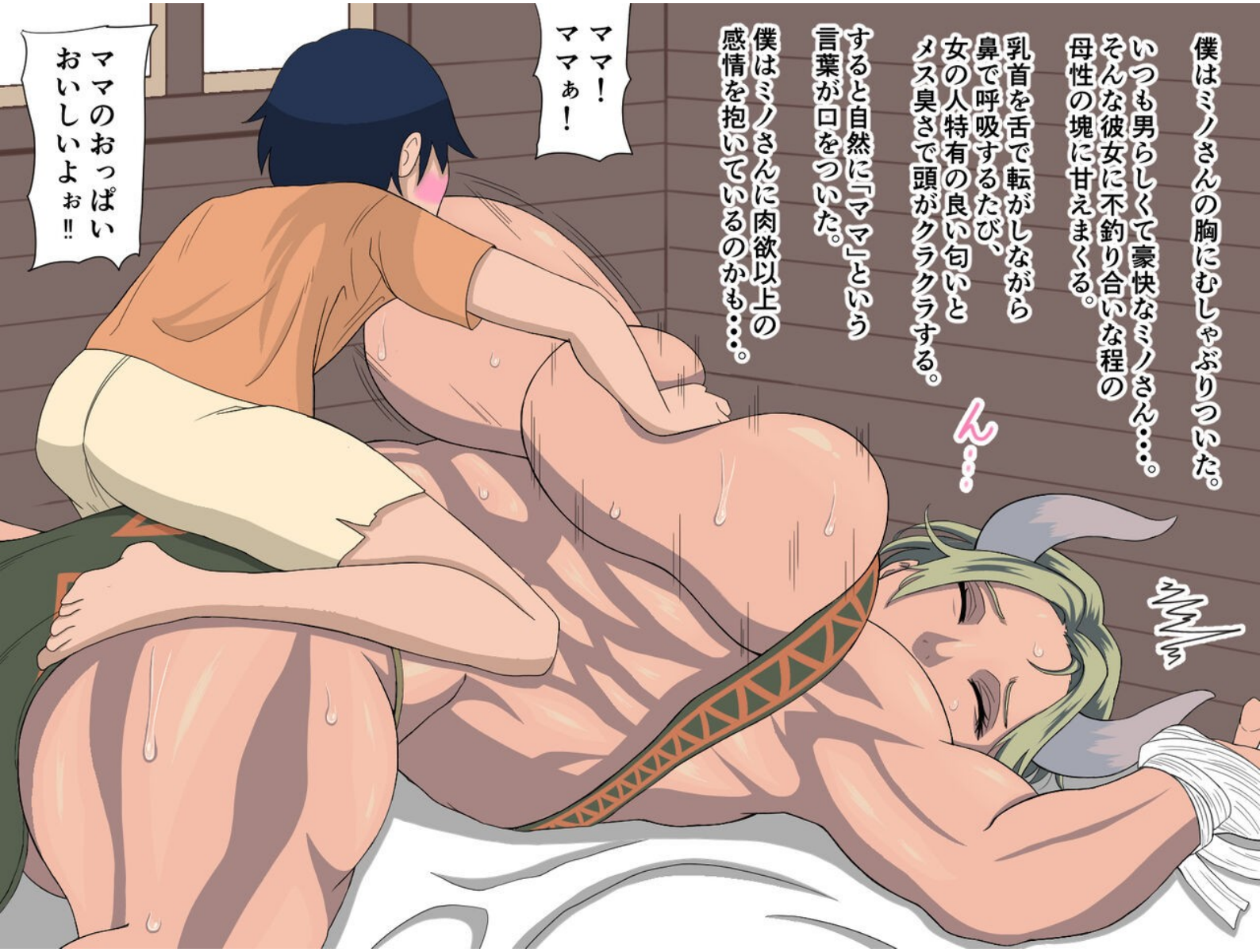

でも僕みたいなチビなんて
ミノさんに相手にされないのは
分かってる・・・
精通したばかりの僕は、
目に悪い彼女の肢体を思いながら、
自分を慰める事しか出来なかった


『お前に好きな女が出来た時に開けなさい』
ある日死んだジイちゃんの言葉を思い出した僕は、
遺品の箱から数々の魔法道具を発見する。
催眠
それにはジイちゃんの説明書きが
添えられており、それを読んだ僕は
とても信じられないという気持ちになった。
そして同時にこう思った。
『これがあればミノさんを好き放題犯せる・・・』


僕は早速ジイちゃんの
遺品の中から、
『睡姦薬』と呼ばれる薬に
目を付けた。
何でも一度服用すると、
数時間何が起きても
目覚めないらしい。
正直嘘くさい・・・
でも物は試しだと、
僕はそれを混ぜた飲み物を
休憩しているミノさんに渡した
すると一時間後、
彼女は眠気を感じたのか
スヤスヤと眠りについた。

目の前で無防備に眠る
ミノさん・・・。その姿を見て
薬の効果が本当だと悟った。
『数時間何が起きても目覚めない』
その言葉が頭で反芻される。
僕は生唾を飲むと、
震える手で彼女の服に
手をかける。
目の前にミノさんの
胸があらわになった・・・。
憧れの人の女性の部分を見て、
僕の理性は焼き切れる。

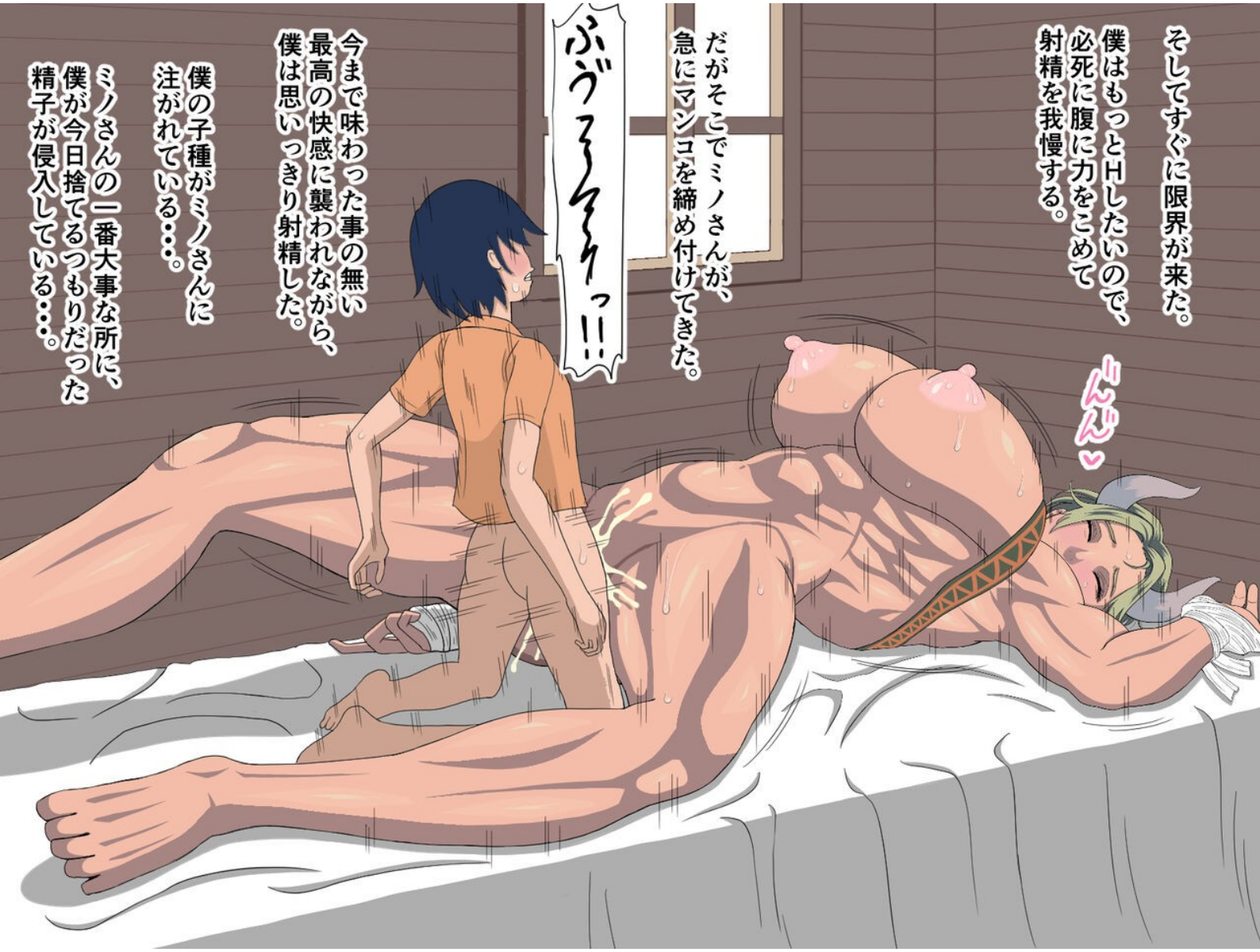
僕はミノさんの胸を
夢中になって揉みしだいた。
とんでもない柔らかさ…。
手にしっとり張り付く潤った肌…。
指を適度に押し返す肉の弾力…。
その全てがとても心地いい…。
ピク♡
おっ
おっぱい！
ミノさんの…！
気持ちい‼

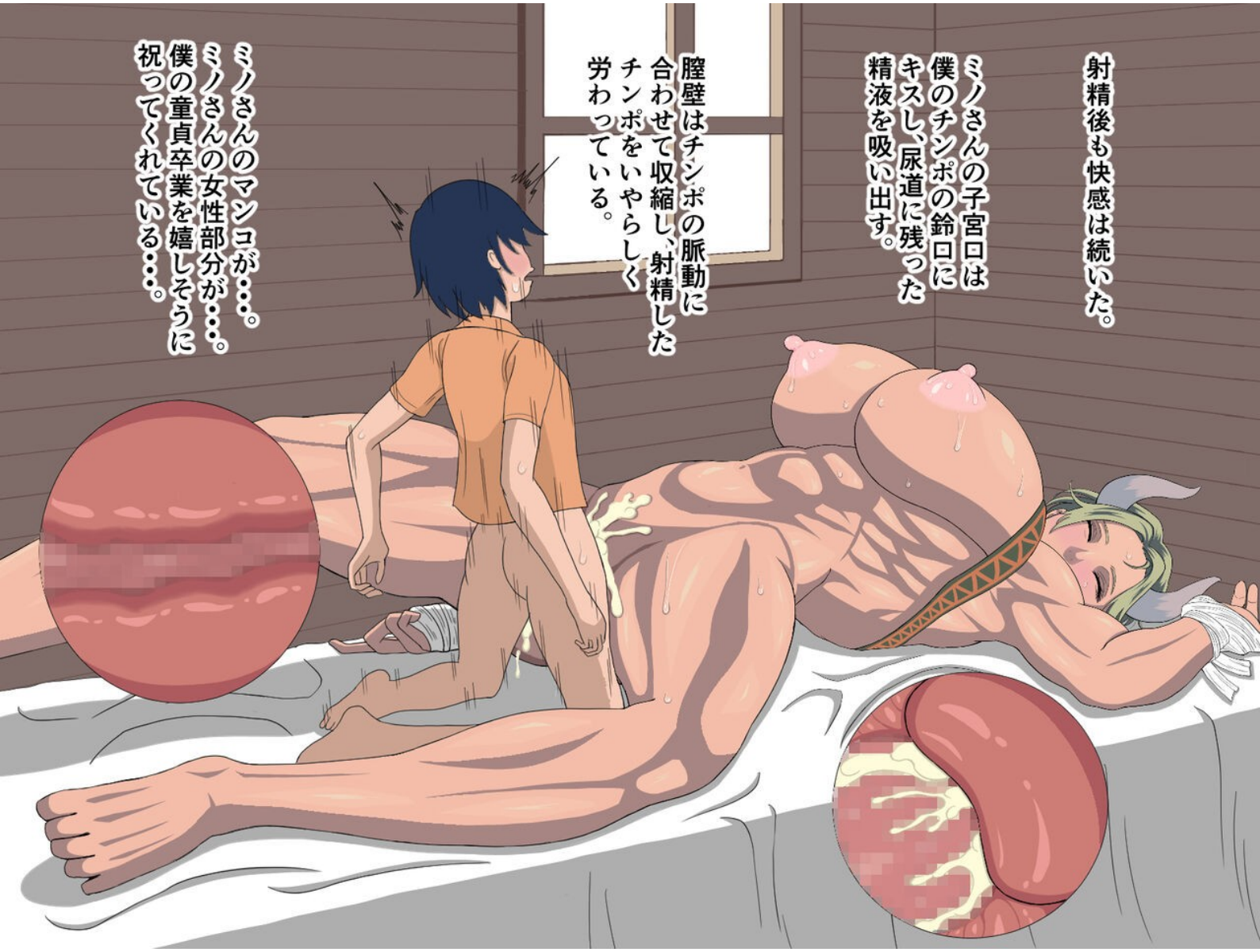

僕はミノさんの胸にむしゃぶりついた。
いつも男らしくて豪快なミノさん…。
そんな彼女に不釣り合いな程の
母性の塊に甘えまくる。
乳首を舌で転がしながら
鼻で呼吸するたび、
女の人特有の良い匂いと
メス臭さで頭がクラクラする。
ん…
すると自然に「ママ」という
言葉が口をついた。
僕はミノさんに肉欲以上の
感情を抱いているのかも…。
ママ！
ママぁ！
ママのおっぱい
おいしいよぉ!!

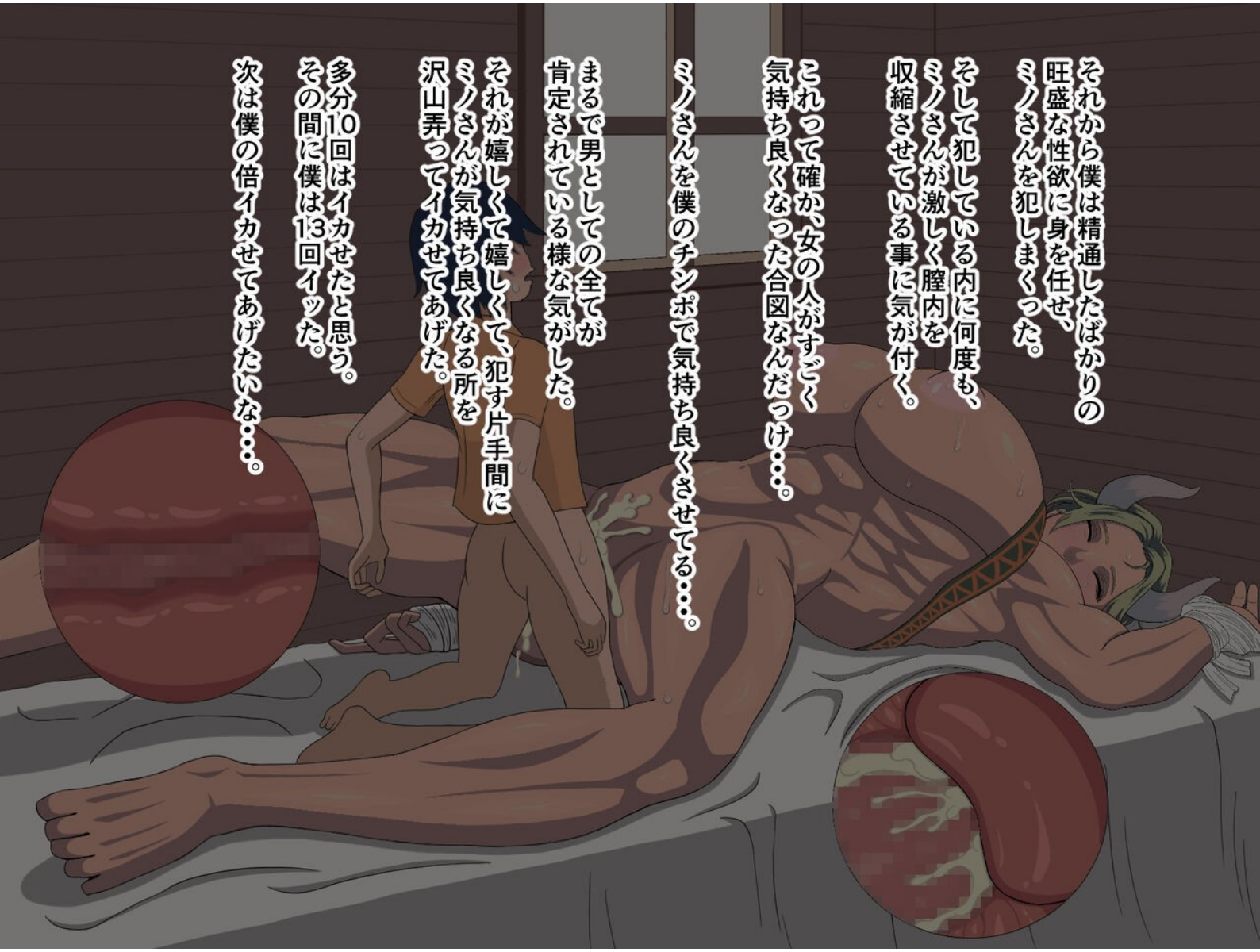
ミノさんのおっぱいに
ひとしきり甘え尽くした僕は、
彼女をじっくり観察した。
乳首が敏感なのか、
隠れていた乳首は
痛いほど勃起している。
また顔は上気しており、
意識が無いながらも
僕の責めに満足して
いるようだった。
その様子を見て、僕の中の男が
このメスに誘われていると
叫んだ。

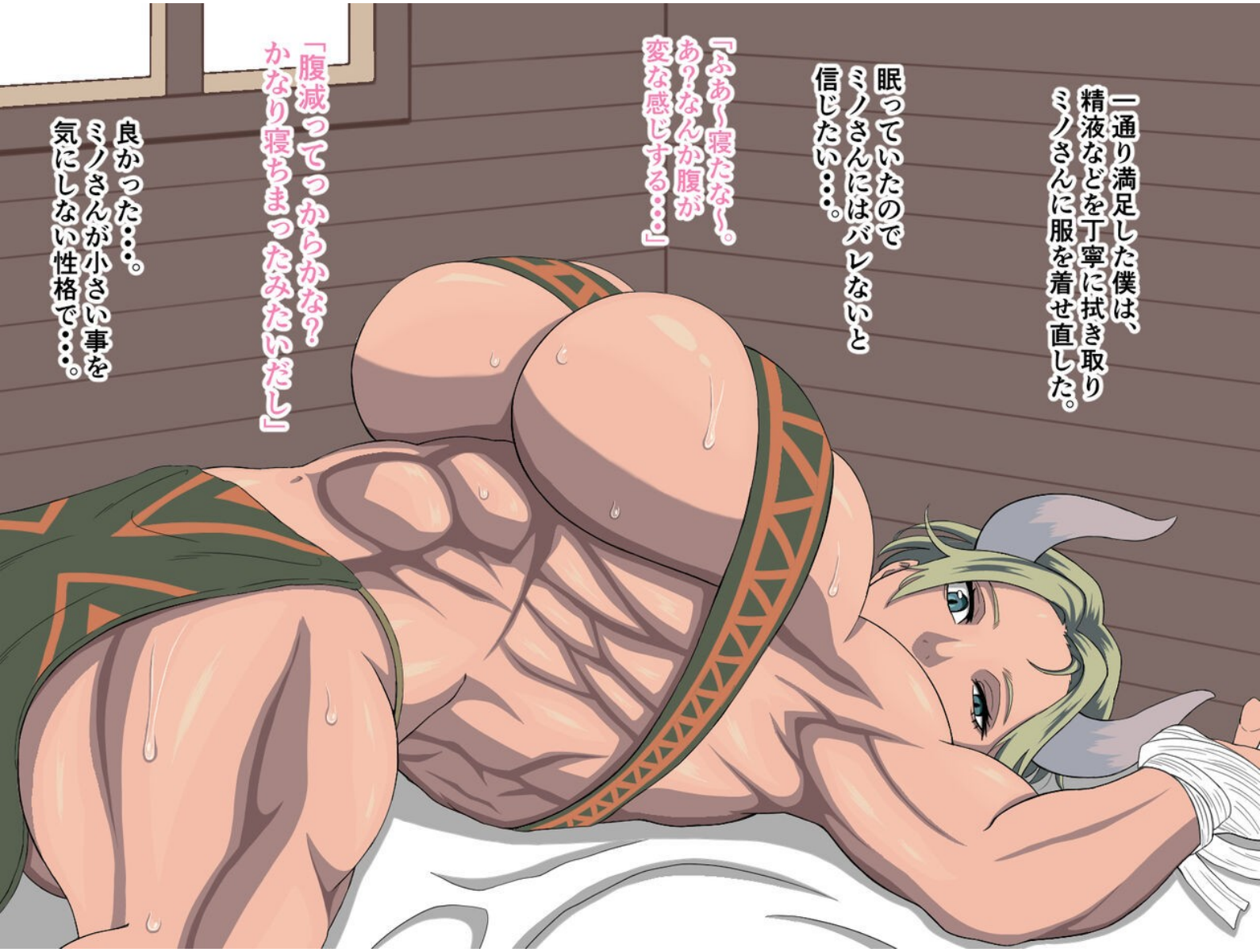
僕は性欲の赴くまま
ミノさんの下着を脱がすと、
一番雌の臭いのする場所に
ちんこをあてがった。
ちんこはにゅるんと
ミノさんのマンコに
吸い込まれ、
僕はその気持ち良さに
情けない声が漏れる。
ぐぅ
ヌルヌルしていて
適度に柔らかいのに、
鍛えているからか締め付けが
スゴい…。
そんな初めて経験する極上の
感触よりも、ミノさんで童貞を
卒業したという実感に
僕は感動していた。

いつも凛々しいミノさんでちんぽをしごいてる…。
僕よりも大きくて強い年上の女性で筆おろししてる…。
昨日までの僕ならとても信じられないその事実に、僕の腰はさらに速くなった。
フッ!!!
フッ!!!
目の前では、僕の腰ふりに合わせてミノさんの巨乳が弧を描いて揺れている。
その光景を見ていると、まるでミノさんの女性を支配している様な感覚になる。
ふっ♡
んっ♡


そしてすぐに限界が来た。
僕はもっとHしたいので、
必死に腹に力をこめて
射精を我慢する。
だがそこでミノさんが、
急にマンコを締め付けてきた。
ふぐぅぅぅっ!!
今まで味わった事の無い
最高の快感に襲われながら、
僕は思いっきり射精した。
僕の子種がミノさんに
注がれている・・・。
ミノさんの一番大事な所に、
僕が今日捨てるつもりだった
精子が侵入している・・・。
んん♡


射精後も快感は続いた。
ミノさんの子宮口は僕のチンポの鈴口にキスし、尿道に残った精液を吸い出す。
膣壁はチンポの脈動に合わせて収縮し、射精したチンポをいやらしく労わっている。
ミノさんのマンコが…。
ミノさんの女性部分が…。
僕の童貞卒業を嬉しそうに祝ってくれている…。


それから僕は精通したばかりの
旺盛な性欲に身を任せ、
ミノさんを犯しまくった。
そして犯している内に何度も、
ミノさんが激しく膣内を
収縮させている事に気が付く。
これって確か、女の人がすごく
気持ち良くなった合図なんだっけ…。
ミノさんを僕のチンポで気持ち良くさせてる…。
まるで男としての全てが
肯定されている様な気がした。
それが嬉しくて嬉しくて、犯す片手間に
ミノさんが気持ち良くなる所を
沢山弄ってイカせてあげた。
多分10回はイカせたと思う。
その間に僕は3回イッた。
次は僕の倍イカせてあげたいな…。


一通り満足した僕は、
精液などを丁寧に拭き取り
ミノさんに服を着せ直した。
眠っていたので
ミノさんにはバレないと
信じたい…。
「ふあ～寝たな～。
あ？なんか腹が
変な感じする…」
「腹減ってっからかな？
かなり寝ちまったみたいだし」
良かった…。
ミノさんが小さい事を
気にしない性格で…。

僕が童貞を捨てた
あの日以降、
僕はミノさんに
手が出せずにいた・・・。
僕が来るたびに
眠気を感じたら、
流石に怪しむと
思ったからだ。
犯したい・・・。あの日沢山愛し合ったのに・・・。
ミノさんを犯したくても犯せない不満に、
僕は悶々とした日々を過ごしていた。

そんな時に僕は
時間停止時計という物を
見つけた。
説明書きによると
時間を止める事ができ、
止まっている間他人は
何も認識できないらしい・・・。
今の僕にピッタリの道具だと思った・・・。
これで僕の存在を感じさせず、
ミノさんのエロい体を使い放題の
肉便器に出来るのだ・・・。

時計のつまみを
目一杯回して押してみる。
すると風が止み
怖いほど静かになった。
ミノさんを見ると
まるで石像の様に
動かない・・・。
彼女の時間が
完全に停止
したのだ・・・。
僕は興奮しながら彼女の服を剥ぐと、
ミノさんのいやらしい恥部が露わになった。
薪割りの途中で止まったからか、
尻を突き出していて挿れやすい姿になっている・・・。

あぁあぁ!!
ミノっ!!
ミノぉ!!
ミノさんのマンコで激しくチンポをしごく。
マンコの感触を味わうだとかそんな余裕は一切ない。
我慢していた分の鬱憤を放出するように、
自然と口調が荒くなった。

やだっ!!
だしたくないっ
だしたくない
のにいいいっ!!
でも久しぶりのミノマンコはやっぱり気持ち良かった・・・。
僕はもっとHしていたいのに、それをさせたくないのか
ミノは容赦なく快感を与えてくる・・・。
僕は段々ミノに腹が立ってきた。

僕の好きなタイミングで射精させてくれない・・。
そんなミノへのイライラと共に大量の精液を吐き出す。
意識が無く、全くの無抵抗となったミノの子宮を、
久しぶりのご主人様ザーメンで溺れさせる。

自分でも驚くほど射精したというのに、
ミノがエロいせいで全然満足できない・・。
僕はムラムラさせられた責任を取って貰おうと、
足腰立たなくなるまでミノで性欲を発散した。

ふう・・。
金玉が空になるまで
ミノさんで遊んだ僕は、
少し頭が落ち着いた。
なんだか
ミノさんに対して
色々失礼な事を
した気がする。
さて家に帰ろうかなと思った所で、時計の説明書きを思い出す。
『時間を解除すると、止めている間の感覚が一気に押し寄せる』。
一気に感覚が押し寄せるってどんな感じだろう?
無邪気な好奇心に駆られた僕は、隠れて時間を解除してみた。

ひゅっ!?
ビクン
ビクン

はっ!?
えっ?
えっ??
ビクッ♡
これって---
ビクッ♡

ひぐぅ!?
うっ!!
ブピッ
ビュル
こんなの!?

イっイク!!
イグ!!
おおおおお
ブピ
ビュル

凄い物を見た…。大の大人の女性があんなに乱れるなんて…。
ミノさんは突然犯された事に気付きつつも、訳が分からない様子だ。
僕は自分の存在が気取られていない事に満足しつつ、
快感で気絶しかかっているミノさんを置いて帰路についた。

僕は今信じられない
光景を目に
している・・・。
ミノさんが自分から
僕のズボンを降ろし、
ちんぽを顔に乗せて
くれているのだ・・・。
ミノさんの柔らかい肌が
とても気持ちいい・・・。
ただ乗せているだけで
フル勃起してしまう・・・。

というのも、
実はジイちゃんの
魔法道具の
おかげだったりする。
『催眠スマホ』。
画面を見せる事で
対象の意識を乗っ取り、
意のままに操る事が
できるらしい。
今まで相手が動かない
Hをしてたから、自分から
動いてくれるミノさんは
新鮮で・・・とてもいやらしい・・・。
催眠

「な、舐めてミノさん・・・」
僕がそう指示をするとミノさんは何の躊躇いもなく僕のちんぽを咥え込んだ。
「あ、ああ・・・❤」
ミノさんのすぼめた口内が僕のちんぽを温かく包み、柔らかい舌が生き物の様にちんぽを這い回る。
まんことは違った気持ち良さに、僕は腰が砕けかけた。
ちゅぽ
ちゅぷ
？
？

「ちょ、ちょっと待ってぇ・・・」
ミノさんの口が
気持ち良すぎて
すぐ出そうになる。
僕はもっと
楽しみたかったので、
ミノさんに一旦止める様
指示した。
ミノさんはさっきまでの情熱的なフェラと打って変わり、
僕のちんぽを口に入れた状態でピタッと止まる。
それでも柔らかい口内の感触と温かい吐息が気持ちい・・。
僕はその快感に負けない様、必死に射精感を抑える。

射精感を抑えている間、
僕の中でとある欲求が
沸き上がってきた。
『ミノさんとコミュニケーションが取りたい・・・』
今までのプレイは全部
ミノさんからの反応が
無かった・・・。
それはそれで悪くは無いのだけど、折角ミノさんの言動を
操る事が出来るのだから、ミノさんから能動的な事をして欲しい。
なので僕はこうお願いしてみた。
「ママ・・・エロい事言ってぇ」

「僕ちゃん、ママのお口気持ち良い？」
はあ♡
その言葉に僕の下腹部が一気に熱くなる。
「き、気持ちいいよママ・・・」
射精したい気持ちを抑えながら必死にそう答える。
はあ♡
「フフ・・ちんちんをイライラさせる悪いミルクは、全部ママの口にコキ出すのよ？」
普段のがさつなミノさんからは、想像も出来ない程甘くて母性に溢れたセリフ・・。
いやもしかたら普段は男らしく振舞ってるだけで、ミノさんの女の部分はこれなのかもしれない・・。

「だ、ださせてママぁ❤」
ママの淫語は
僕の我慢を
決壊させるのに
十分だった。
懇願するように
指示をすると、
ママがフェラを
再開させる。
それは今までの手加減したフェラではなく、
僕の精子を性欲ごと吸い尽くす様なフェラだった。
女が男を喜ばせるためにする事を、ママが僕のちんちんを
スッキリさせるためにしてくれる・・。
ぢゅぽ〜
ぐぽ〜
ぐぽ〜
ぶぼ〜

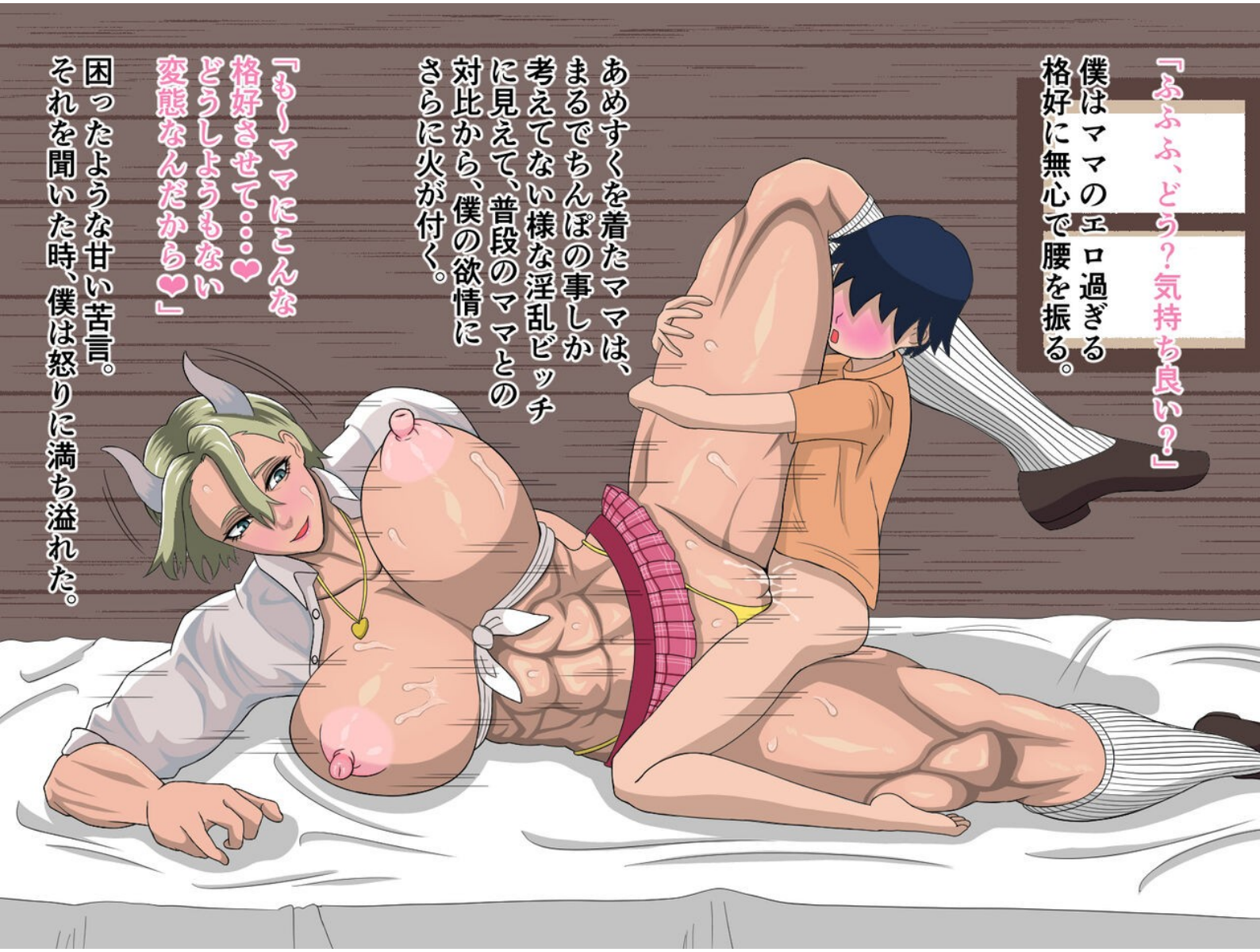
「ママ！出るよぉ!!」
僕はとうとう
我慢できず、
ママの口に
精液を吐き出した。
ビュルルルル～
ん～
ママの綺麗な口に、精液みたいな汚い物をコキ出している。
その実感だけで、いつもより多く精液が出ている気がした。

「じゅる…じゅぽ…❤」
ママは僕が
射精した後も、
僕のちんぽを
愛してくれる。
じゅる❤
じゅるる❤
射精直後の敏感に震えるちんぽを舌で愛撫し、
尿道に残った精液も残すまいと一生懸命吸い出す。
その愛情たっぷりのサービスに、金玉でぐつぐつ精液が作られる。

ママはひとしきり
僕から精液を
搾り取ると、
僕のちんぽを
顔に乗せ休憩させて
くれる・・・。
精液まみれの顔は
聖母の様に優し気で、
射精して満足した僕を
愛おしそうに
見つめていた・・・。
その間もママは僕の精液をじっくり咀嚼しており、
射精して良かったと心の底から感じさせてくれる。
くちゅ
くちゅ

ママは僕の精液を
味が無くなるまで
味わうと、
勢いよく
それを飲み下した。
粘度の高い液体が
喉を伝う音が
大きく響く。
「ママに美味しいミルク
御馳走してくれてありがと❤
次はどの穴で遊ぶ？」
ゴキュン❤
ちんぽを舐めていたとは思えないほど良い笑顔で
そう言われ、僕はまたちんぽがバキバキになった。
次はママのおまんこに御馳走してあげたい・・・。

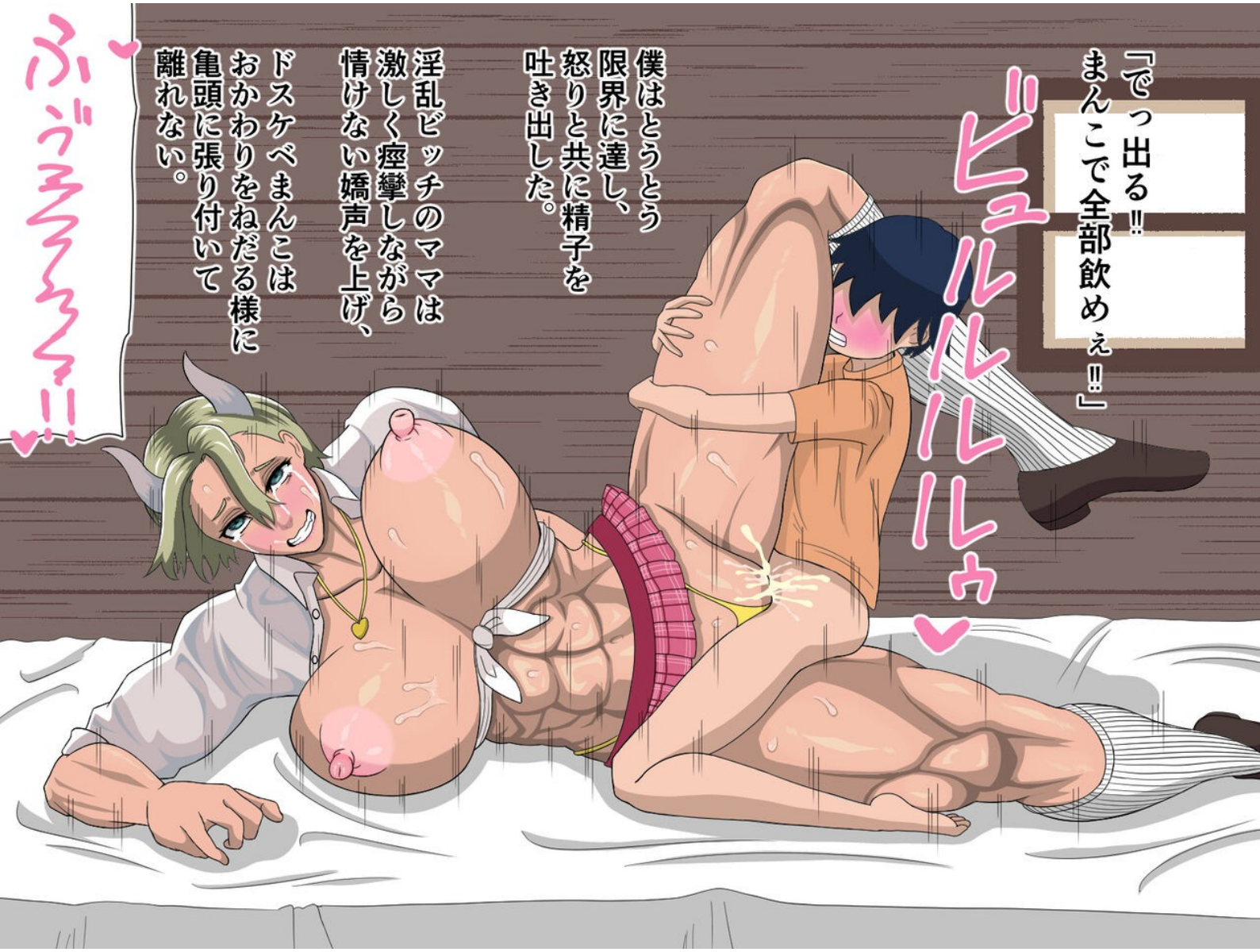
僕は次にママとおまんこエッチしようと思ったが、遺品の中にある物を発見する。
それは「あめすく」？という物で、何の効果も無い普通の服だった。
ただこれはママに絶対似合う・・・。
そう思った僕はママにそれを着るようお願いした。

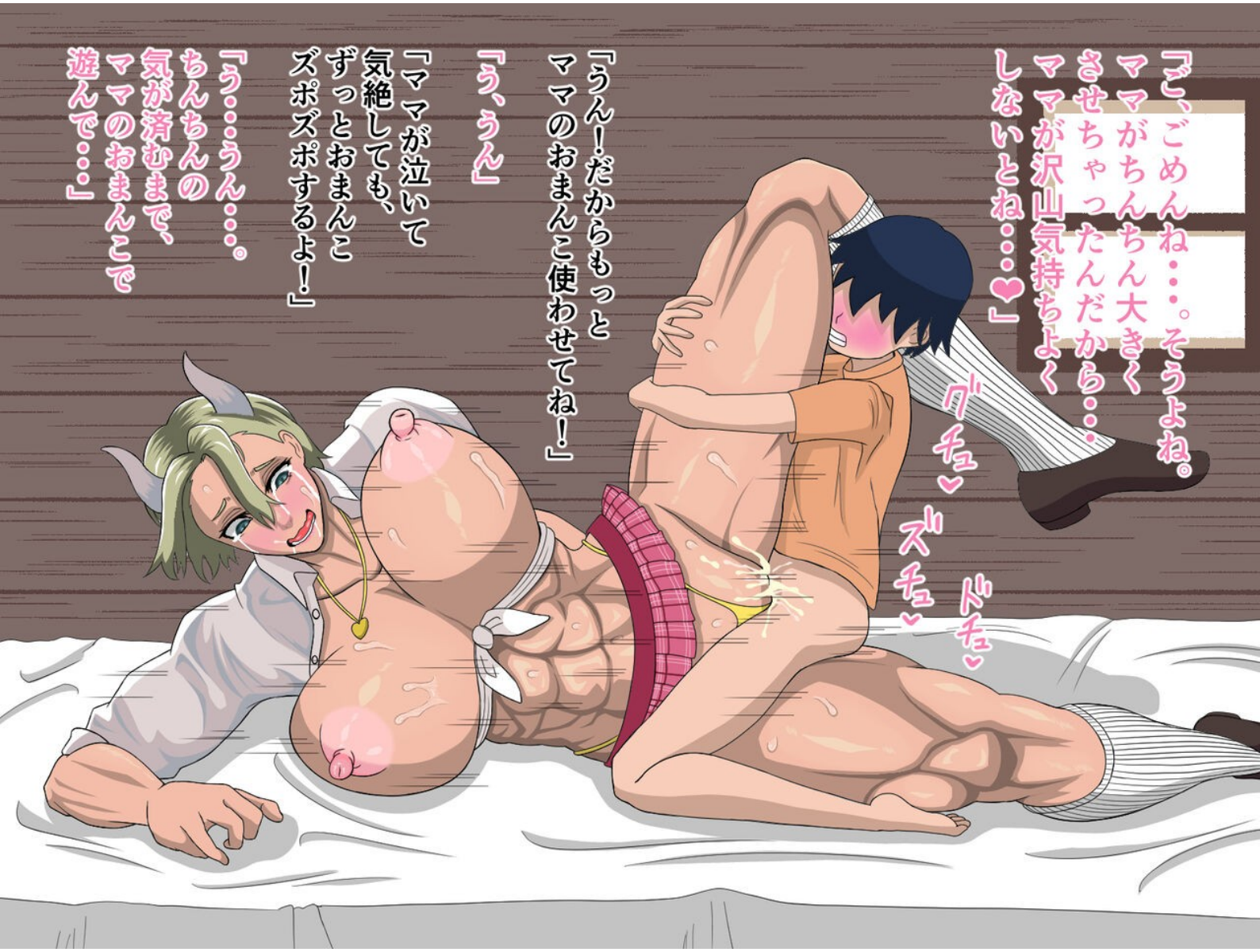

「ふふふ、どう？気持ち良い？」
僕はママのエロ過ぎる格好に無心で腰を振る。
あめすくを着たママは、まるでちんぽの事しか考えてない様な淫乱ビッチに見えて、普段のママとの対比から、僕の欲情にさらに火が付く。
「も～ママにこんな格好させて・・・❤どうしようもない変態なんだから❤」
困ったような甘い苦言。
それを聞いた時、僕は怒りに満ち溢れた。

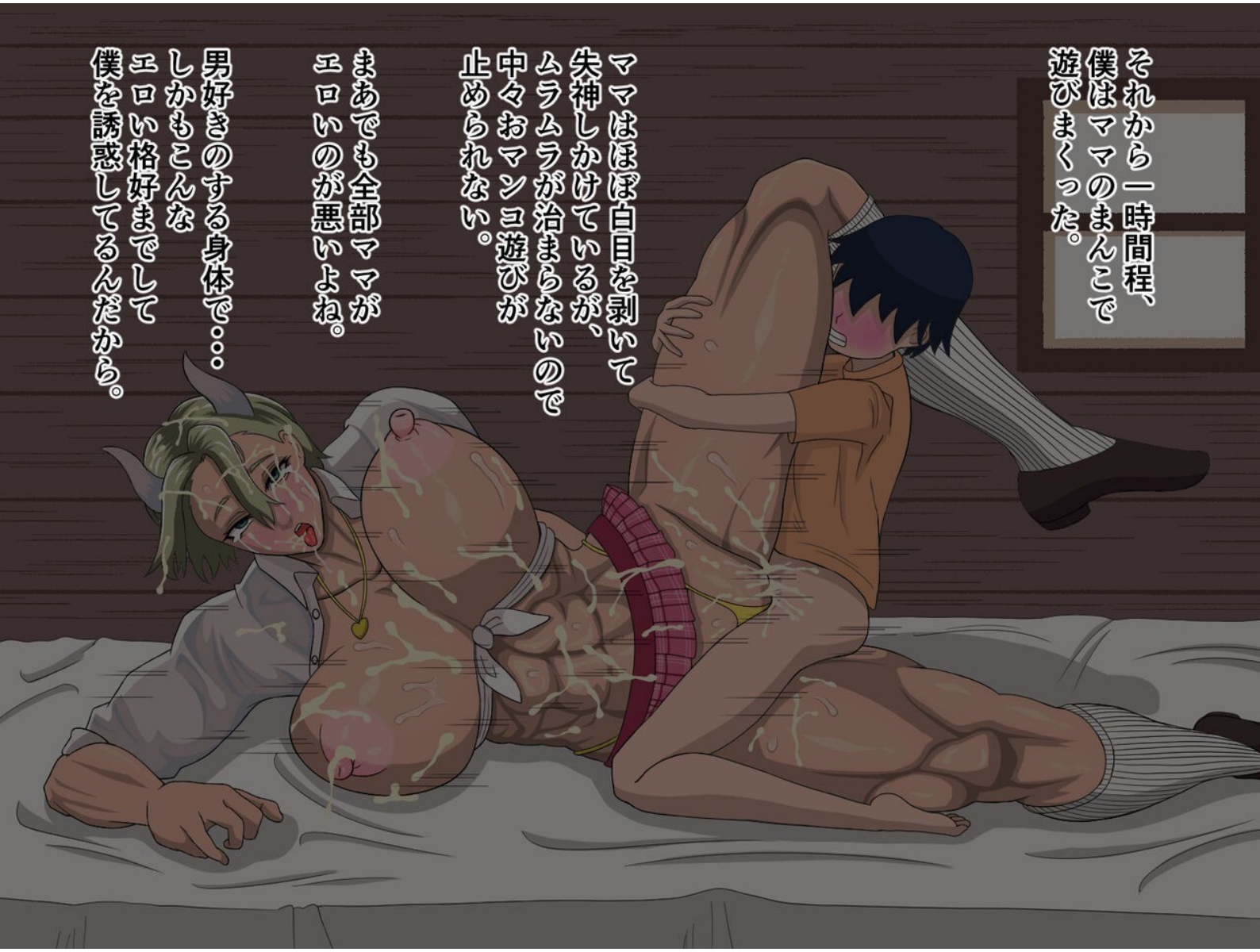
「お前のせいだ!!」
フー!!
フー!!
僕は怒りに任せて
勢いよくママの子宮口を
ちんぽでノックした。
ママは不意の快感に
びっくりしたのか、
間抜け声を上げながら
息子のちんぽを
ギュッと締め付ける。
んおおお♥

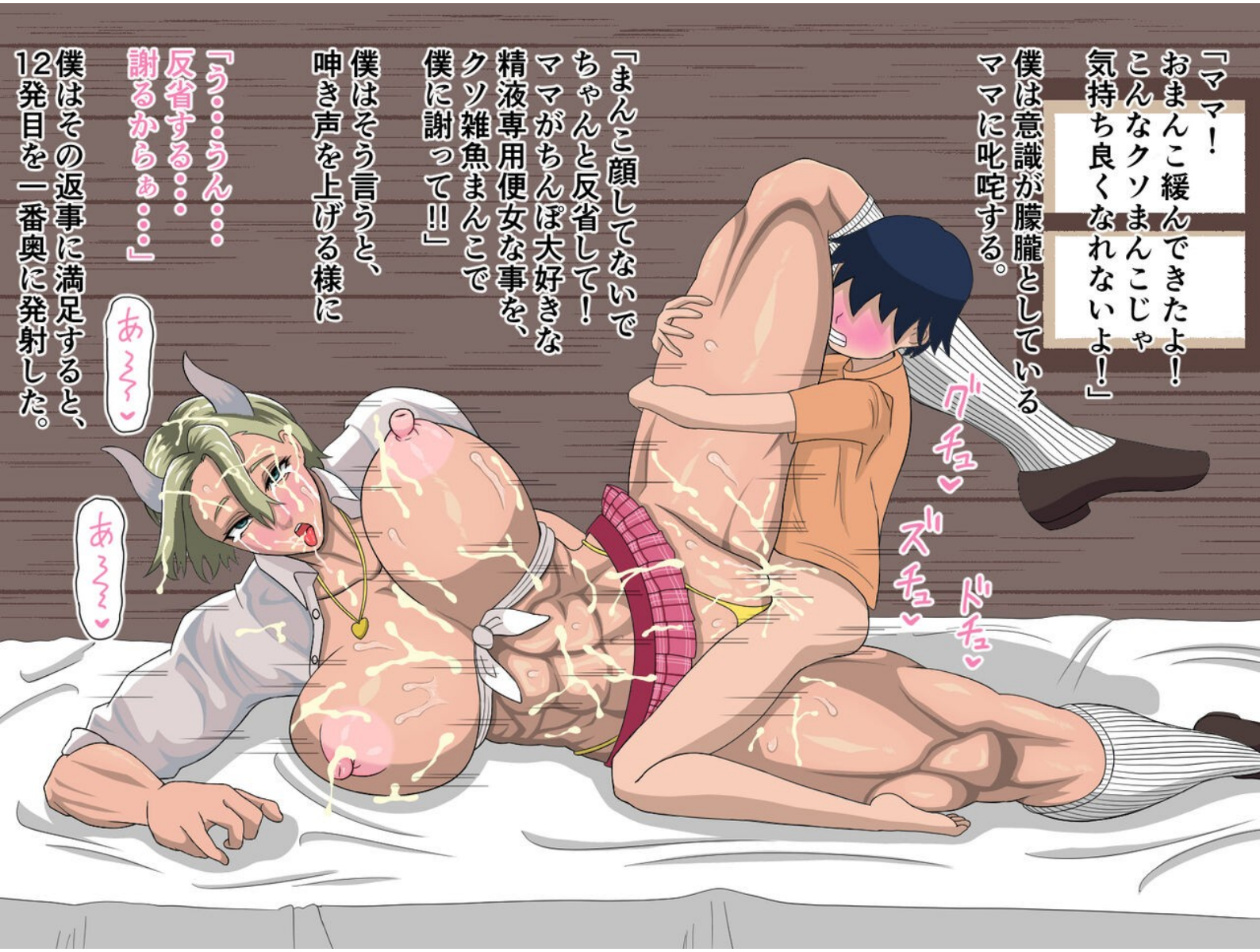
「全部ママが悪いんだ！」
僕の腰が早くなる。
「僕だってママにこんな格好させたくない！」
「ママを犯したくない！」
「でもママがエロ過ぎるのがいけないんだ！」
ママは自分がどれだけ男を欲情させ、精子を搾り取る身体をしているか分かってない!!
ん!?んっんくっ!!

「ママが責任取れよう！
僕をムラムラさせた
責任取ってぇ！」
僕はママに反省して
欲しくて、怒りをこめながら
子宮口を乱暴に叩きまくる。
ママは無責任に
イキまくるだけだが、
まんこは反省の色を
示す様にうねり、
ちんぽを気持ち良く
してくれる。
イクッイグゥ!!


「でっ出る!!!
まんこで全部飲めぇ!!!」
ビュルルルルゥ♥
僕はとうとう
限界に達し、
怒りと共に精子を
吐き出した。
淫乱ビッチのママは
激しく痙攣しながら
情けない嬌声を上げ、
ドスケベまんこは
おかわりをねだる様に
亀頭に張り付いて
離れない。
ふぅぅぅぅ!!♥


「ご、ごめんね・・・。そうよね。
ママがちんちん大きく
させちゃったんだから・・・
ママが沢山気持ちよく
しないとね・・・❤」
グチュ❤
ズチュ❤
ドチュ❤
「うん！だからもっと
ママのおまんこ使わせてね！」
「う、うん」
「ママが泣いて
気絶しても、
ずっとおまんこ
ズポズポするよ！」
「う・・・うん・・・。
ちんちんの
気が済むまで、
ママのおまんこで
遊んで・・・」


それから一時間程、
僕はママのまんこで
遊びまくった。
ママはほぼ白目を剥いて
失神しかけているが、
ムラムラが治まらないので
中々おマンコ遊びが
止められない。
まあでも全部ママが
エロいのが悪いよね。
男好きのする身体で・・・
しかもこんな
エロい格好までして
僕を誘惑してるんだから。


「ママ！
おまんこ緩んできたよ！
こんなクソまんこじゃ
気持ち良くなれないよ！」
僕は意識が朦朧としている
ママに叱咤する。
ガチュ♥
ズチュ♥
ドチュ♥
「まんこ顔してないで
ちゃんと反省して！
ママがちんぽ大好きな
精液専用便女な事を、
クソ雑魚まんこで
僕に謝って!!」
僕はそう言うと、
呻き声を上げる様に
「う・・・うん・・・
反省する・・・
謝るからぁ・・・」
あぇぇ♥
あぇぇ♥
僕はその返事に満足すると、
12発目を一番奥に発射した。

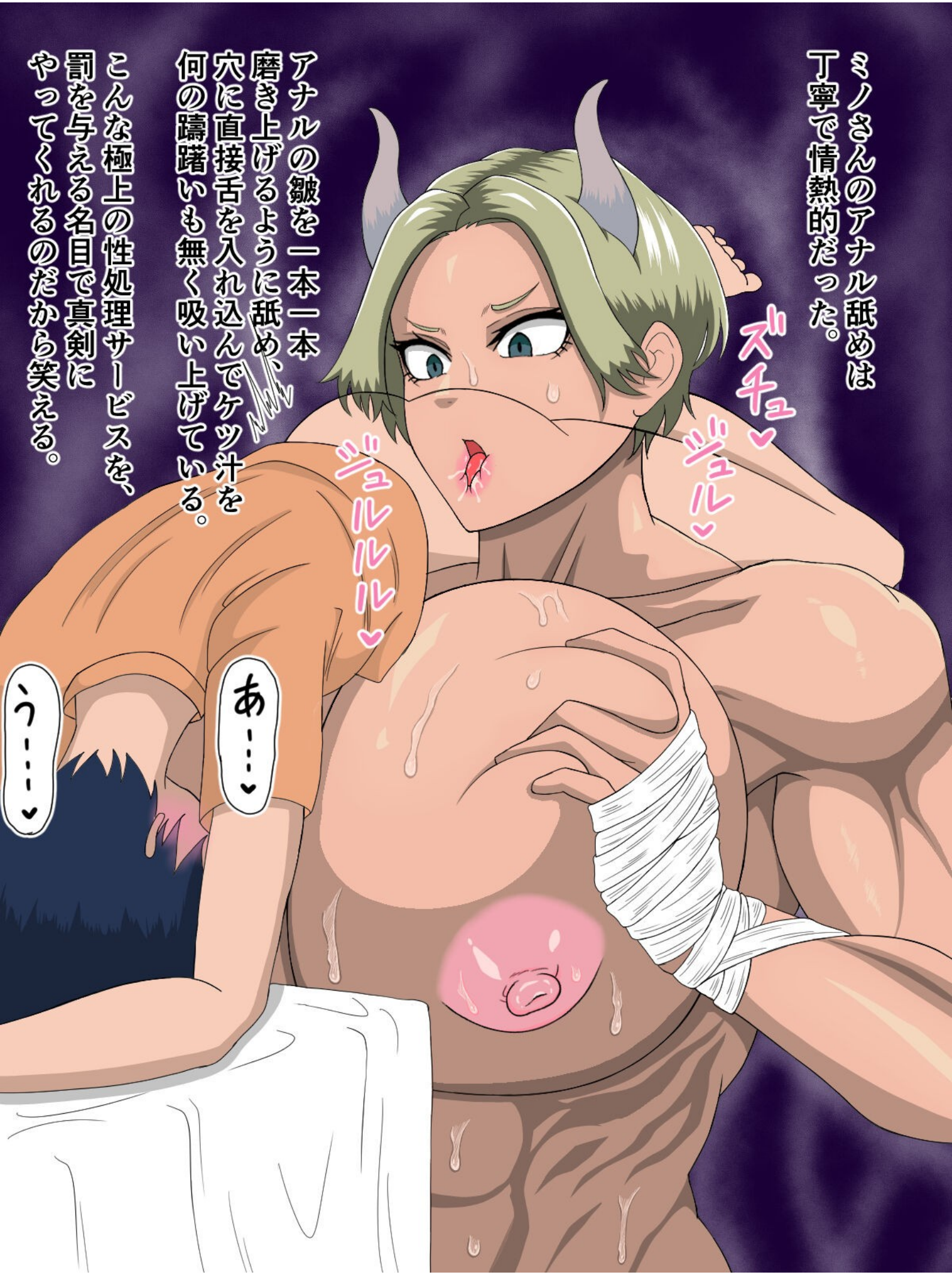
僕は今、ミノさんに攫われて
尋問を受けている・・・。
どうやら今まで僕が
ミノさんにしていた事が
バレてしまったらしい・・・。

「テメエだな？私を好き放題犯してやがったのは」
その声は底冷えするほど
迫力があり、
僕は身震いした。
ミノさんは敵意と軽蔑をありありと表している。
それは人間を見るというより、もっと汚いものを
見ている様な感じで、さらに僕の心を抉る。
「テメエみてえなコソコソしたクソ野郎は容赦しねえ・・・。
たっぷり罰を与えてやっから覚悟しろよ」

ミノさんはそう言った直後、
アナル舐めパイズリを
始めた。
クチュ♡
クチュ♡
逃げない様大きな胸で
ちんぽをガッシリ掴まえ、
真剣な顔で僕のアナルを舐めている。
それもミノさんが自分の意思で
やってくれているのだ・・・。

「おら！動くんじゃねえ！
ケツ穴舐められねえじゃ
ねえか！」
クチュ♥
クチュ♥
「ご、ごめんなさい・・・！」
僕は大人しく尻の穴を差し出す。
この世界で女の人を犯したら、
女の人から犯されるのが罰だ。
だからこれは当然の責め苦なのだ。

というのは冗談で、
これは催眠の一つである
「常識改変」のおかげだ。
以前の催眠のオプションで、
対象の常識を変えることが出来るのだ。
今回ミノさんには、
「女を犯した男は女に犯されることで、
その罪の重さや苦しみを味あわなければならない」
という常識を与えている。
つまりこのアナル舐めパイズリも、ミノさんには常識なのだ。


ミノさんのアナル舐めは
丁寧で情熱的だった。
アナルの皺を一本一本
磨き上げるように舐め、
穴に直接舌を入れ込んでケツ汁を
何の躊躇いも無く吸い上げている。
こんな極上の性処理サービスを、
罰を与える名目で真剣に
やってくれるのだから笑える。
ズチュ♡
ジュル♡
ジュルルル♡
あ---♡
う---♡

ミノさんのご奉仕があまりに
気持ち良すぎて、僕のちんぽが
ひくひくと脈打つ。
それを感じ取ったミノさんは誇らしげに
「へへへ。そうとう参ってきたようだな。
レイプ魔にはこれが一番効くんだ」
僕はあまりの責め苦に喘ぐ事しか出来ない。
「だがこれからが本番だぜ？
私の巨乳でたっぷり苦しめてやる！」
あ…
あ…

「おら！気持ちいだろ？」
「イケ！イケ！」
ミノさんがパイズリの速度を上げる。
「女にケツ舐められながら、
無様に精液無駄撃ちしろ!!」
ミノさんのおっぱいは蒸れ蒸れで、
まんことはまた違った感触で
僕のちんぽを楽しませてくれる。
おまけに女性にアナルを舐めさせている
非日常が、僕を簡単に限界に導いた。
あ---♡
あ---♡

僕は思いっきり射精した。
はっきり言って今までで
一番興奮したと思う。
尻穴にハマった舌を逃がさない様、
足でミノさんの頭を固定する。
その感触を味わいながら、
柔らかくて弾力のある胸に
射精するのは最高の体験だった。
ビュク♡
ビュルルルル♡
イク!!
イクぅ♡

……
ビュッ♥
ビュル♥
ハアハア♥

あぁ!!
チュポン

「女みてえな声上げて
胸まんこに射精しやがって。
情けねえ」
ミノさんは僕のアナルから勢いよく舌を抜くと、
ニイっと不敵に笑って見せた。
「私が受けた恥辱はこんなもんじゃねえぞ!!
足腰立たなくなるまで射精させて、
私を犯した罪を思い知らせてやる!!」
僕はその言葉を聞き、
ちんぽが硬くなるのを感じた。
はっはい---

「どうだ？私のマンコ
気持ち良いだろう？」
必死に腰を振る
僕にミノさんは
そう尋ねる。
常識改変されたミノさんは
次はおまんこで僕に罰を
与えたいらしい。
ただ今の僕にとっては、
開発済みの使い勝手の良い
おまんこでしかなく、
少し退屈になってきた。

「ご、ごめんなさい…
許してぇ…」
そう言うと
彼女は意地悪く
笑った。
「ダメだね。
テメエは好きでもねえ女に
無理矢理レイプされながら
無様にイクんだよ！
ほら！筋肉女の肉厚まんこに
とっとと精液ぶり撒けや！」

ミノさんが
いつもの口調で
卑猥な事を言っても
僕は全然
興奮しなかった。
まあでも
それも仕方ない。
今まで散々ミノさんの
まんこを味わい尽くしたのだ。
単純に飽きてきたのだろう・・・。
と、そこで僕はふと思った。
「この状態で意識だけ
催眠解除したらどうなるんだろう？」

僕は好奇心の赴くまま、
ミノさんの意識だけを
催眠解除してみた。
「テメェは一生
私の性奴隷として
使ってや・・・」
え・・・・・
さっきまでの威勢はすぐに
消え去り、ミノさんは一瞬
混乱した様な表情をする。
そして徐々に自分の今の
状況を把握し始めた。
いつのまにか男に
犯されているという状況を。

「なっ、おいお前・・・何して・・・」
そこで彼女は全てを理解したらしい。
「嘘だろテメェ!?やめろ・・・!やめろぉ!!」
ミノさんは顔を引きつらせ、恐怖に染まった声音で怒鳴った。
その催眠のかかってないミノさんのリアルな感情に、僕は今までに無い興奮を感じた。

「クソ…！なんで身体が動かねえんだよ！おい退けよ！腰振んな！」
「なんで？ママが僕をレイプしてるんだよ？思い出して？ママが僕にしてくれた事」
ママの表情が段々と青ざめてくる。
ママは今まで自分がされてきた事を思い出したのだろう。
その絶望感を伴った顔を見ていると、もっとママを虐めたくなってきた。

ママの反抗的な態度と、
ちんぽを追い出そうとする
まんこの締め付けに
僕は腹が立ってきた。
これはきっちり躾けなきゃ…。

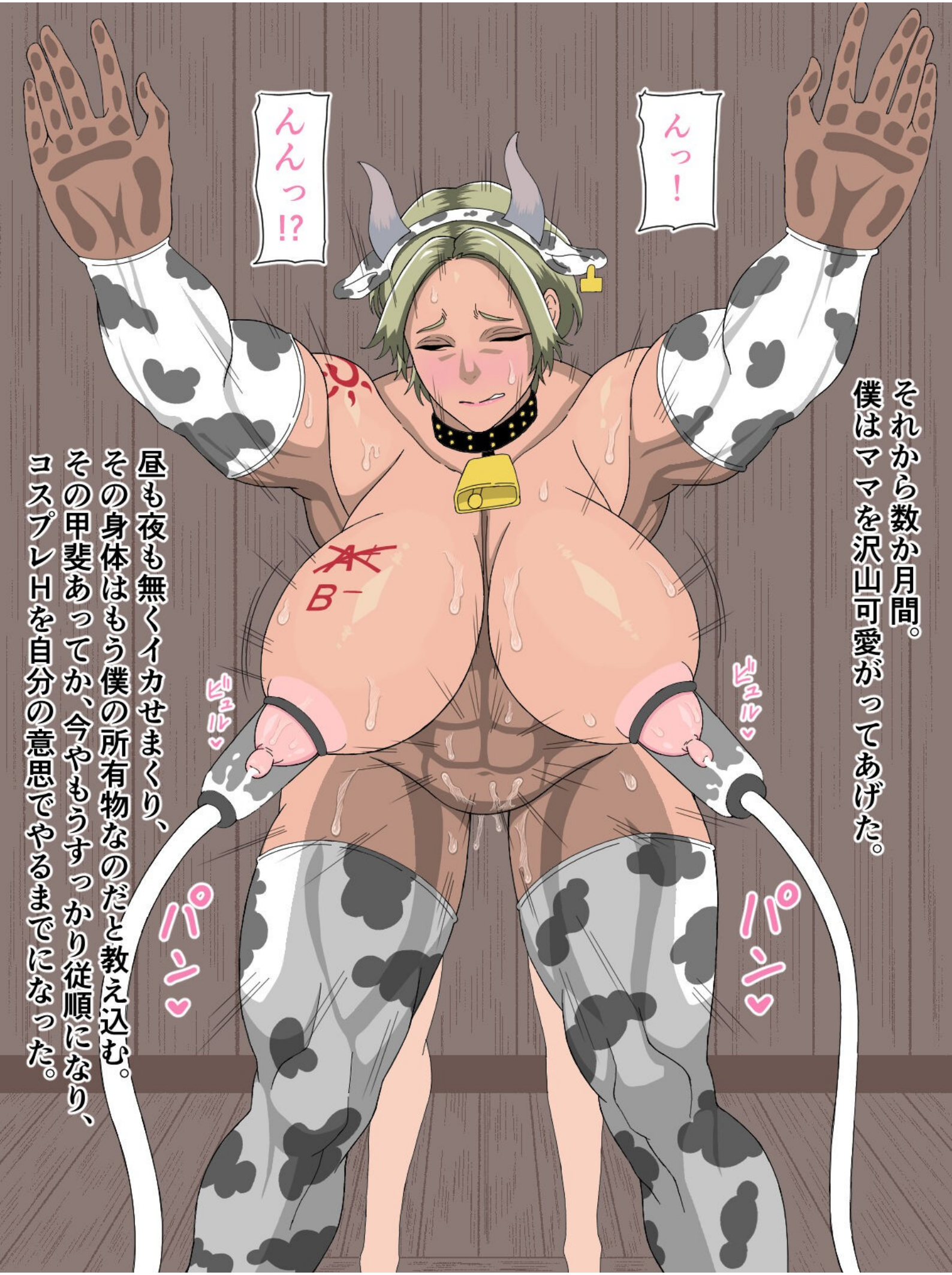
「殺すってどうやってぇ!!」
僕はママのお気に入りの子宮口ドチュドチュをしながら叫んだ。
おほぉ♥
どちゅ♥
ママはまんこでひり出した様な間抜けな喘ぎ声をあげながら、まんこを収縮させてご主人様のちんぽに目一杯甘える。
頭では強気ぶってるけど、まんこはどこまでも正直だ。

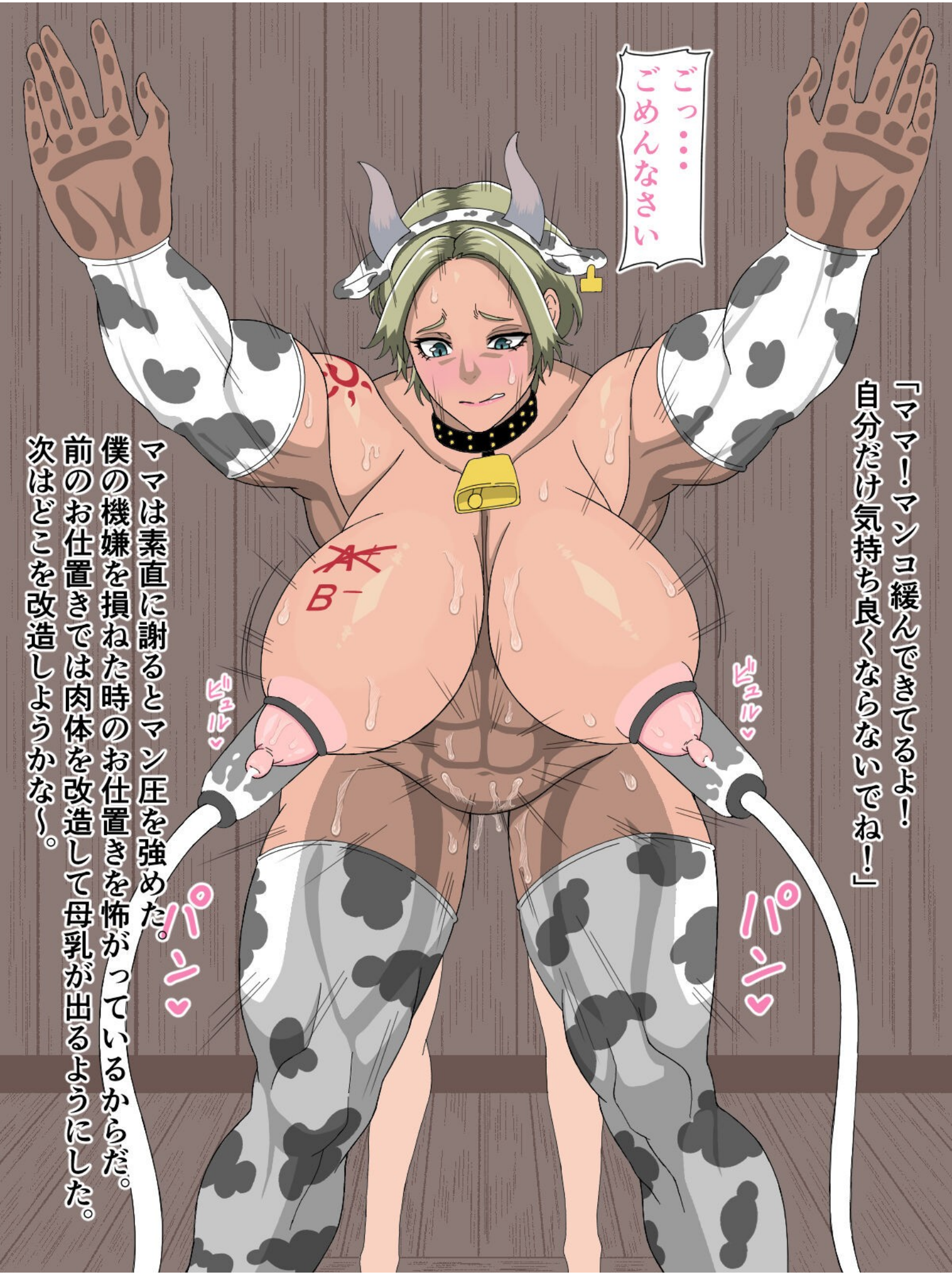
「こんな少し小突いただけで良い子になっちゃうクソ雑魚まんこでどうやって僕を殺すの!?」
ママのまんこを突きながら言う。
おぉ!!
おぉぉ♥
「僕のちんぽ見ただけで子宮が降りてきちゃう癖にどうやってぇ？ねぇ教えてママ～」
改造され尽くしたまんこは強烈な快楽をママに与え、まともに喋る事すら許さない。

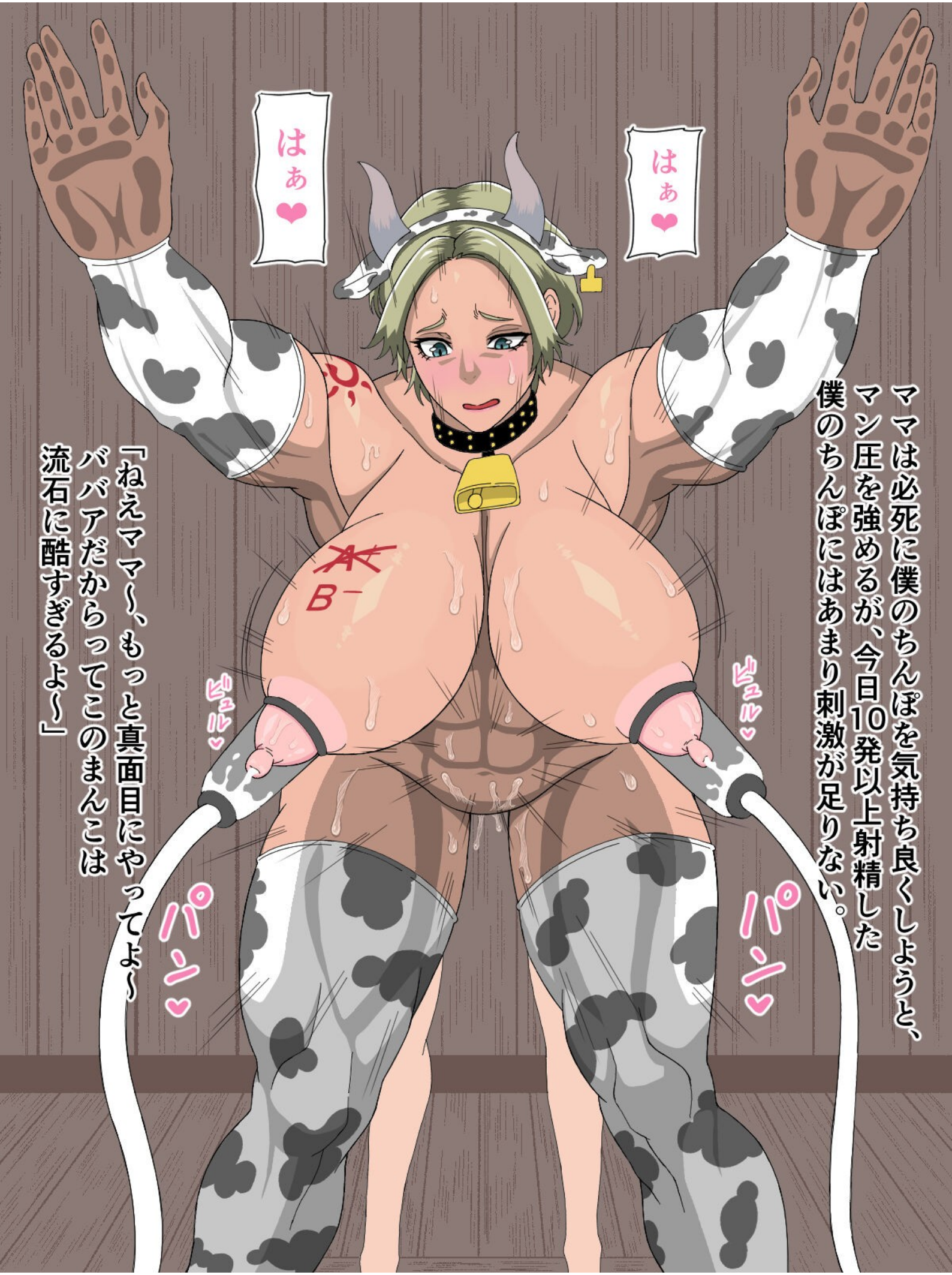
「あああああ！やばい！
そろそろ出る！
ママの子宮で精子
遊びたがってるよぉ!!」
「やだ！
やめてぇ！」
「今出されたらっ」
僕のちんぽが限界を迎える。
使い慣れたまんこと言えど、
ママは息子の精子を
逃がしたりしないのだ。
ママは何か言ってる気がした。
「早くぅ❤」「いっぱい出して❤」
とかそんな所だろう。

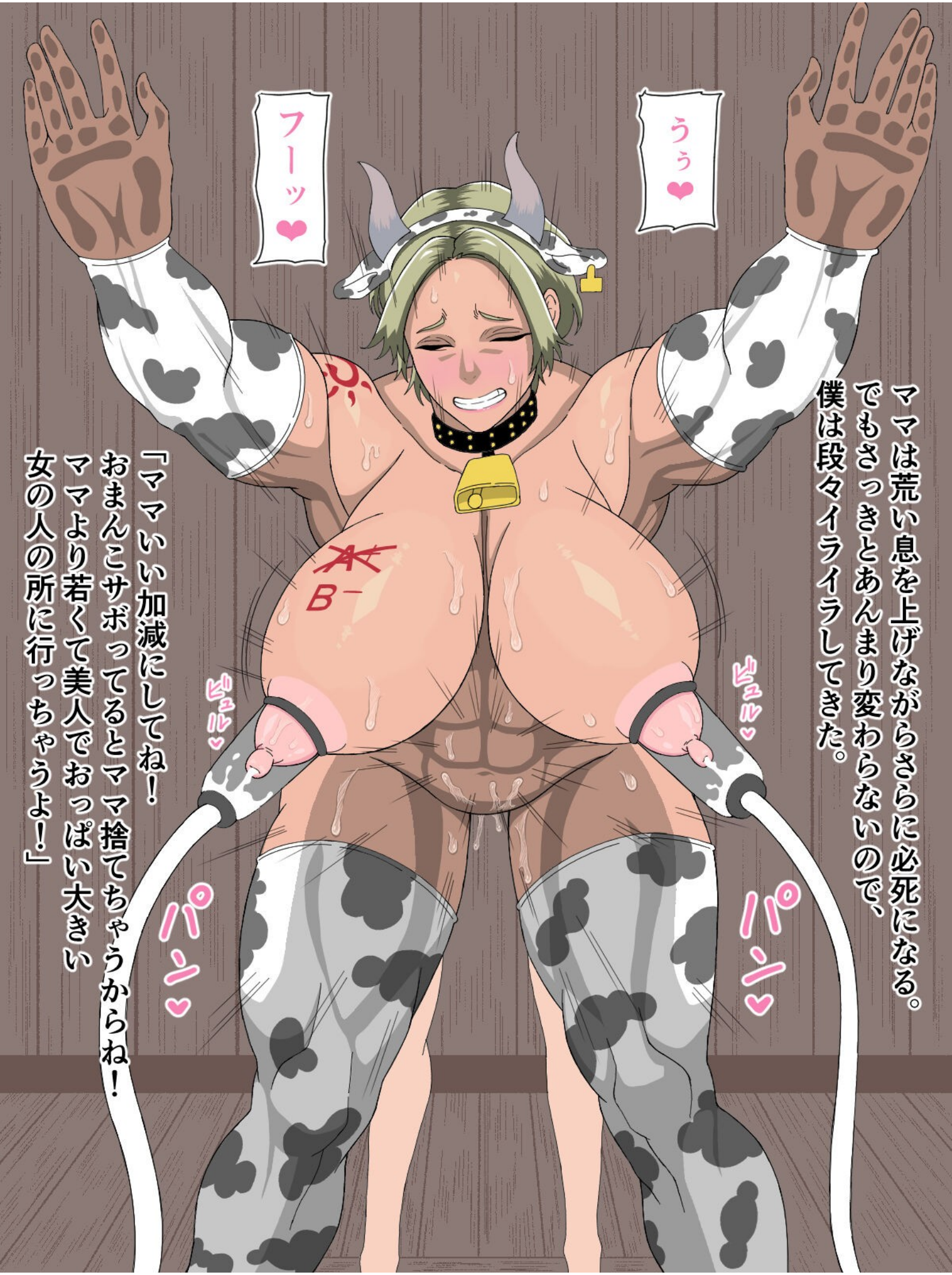
「出る！濃いの出る!!
イってママ！
僕と一緒にイケ!!」
ビュルルルル♥
ヴヴ♥
僕はママのまんこに
精液をぶり撒いた。
Hに慣れた僕はあんまり
気持ち良く無かったけど、
ママは嬉し泣きしながら
子宮で精液を嚥下しているので、
まあ射精してやって
良かったかな？と思った。

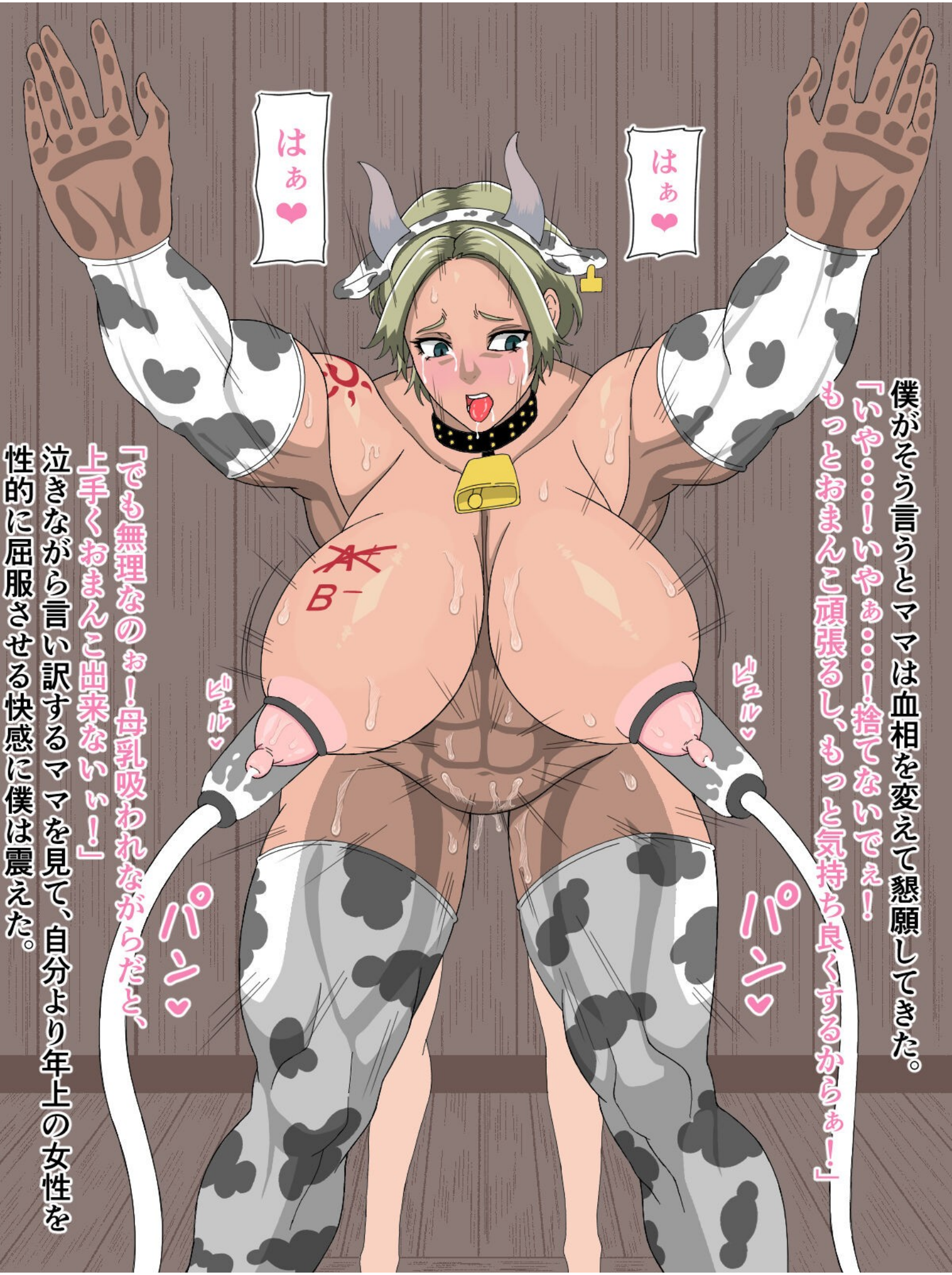
それから数時間
僕は種付けしまくった。
いくら抵抗しても、ママは
マンコで僕の性処理を
するしかないのだと
教える様に。
あぁ
おぉっ
「もうイクのやだ…
気持ち良いのイヤ…」
「ダメだよ。ママはもう
僕専用の性欲サンドバック
兼ミルクサーバーなんだから。
おまんこもおっぱいも
ずーっと気持ちいままだよ」
そう言うとママは一瞬だけ声も出さず泣いた。

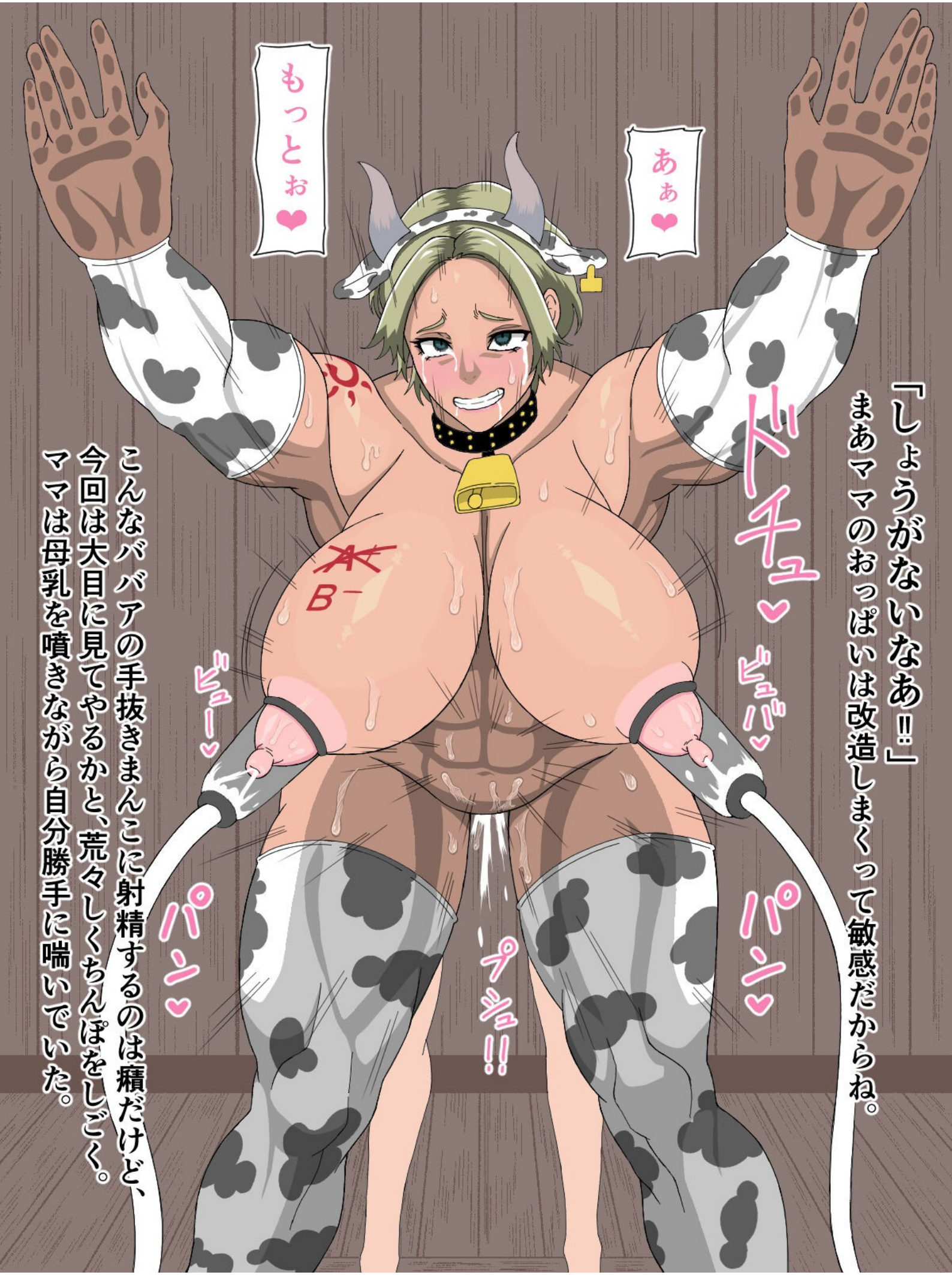

んっ！
んんっ!?
それから数か月間。
僕はママを沢山可愛がってあげた。
昼も夜も無くイカせまくり、
その身体はもう僕の所有物なのだと教え込む。
その甲斐あってか、今やもうすっかり従順になり、
コスプレHを自分の意思でやるまでになった。
ビュル♡
ビュル♡
パン♡
パン♡

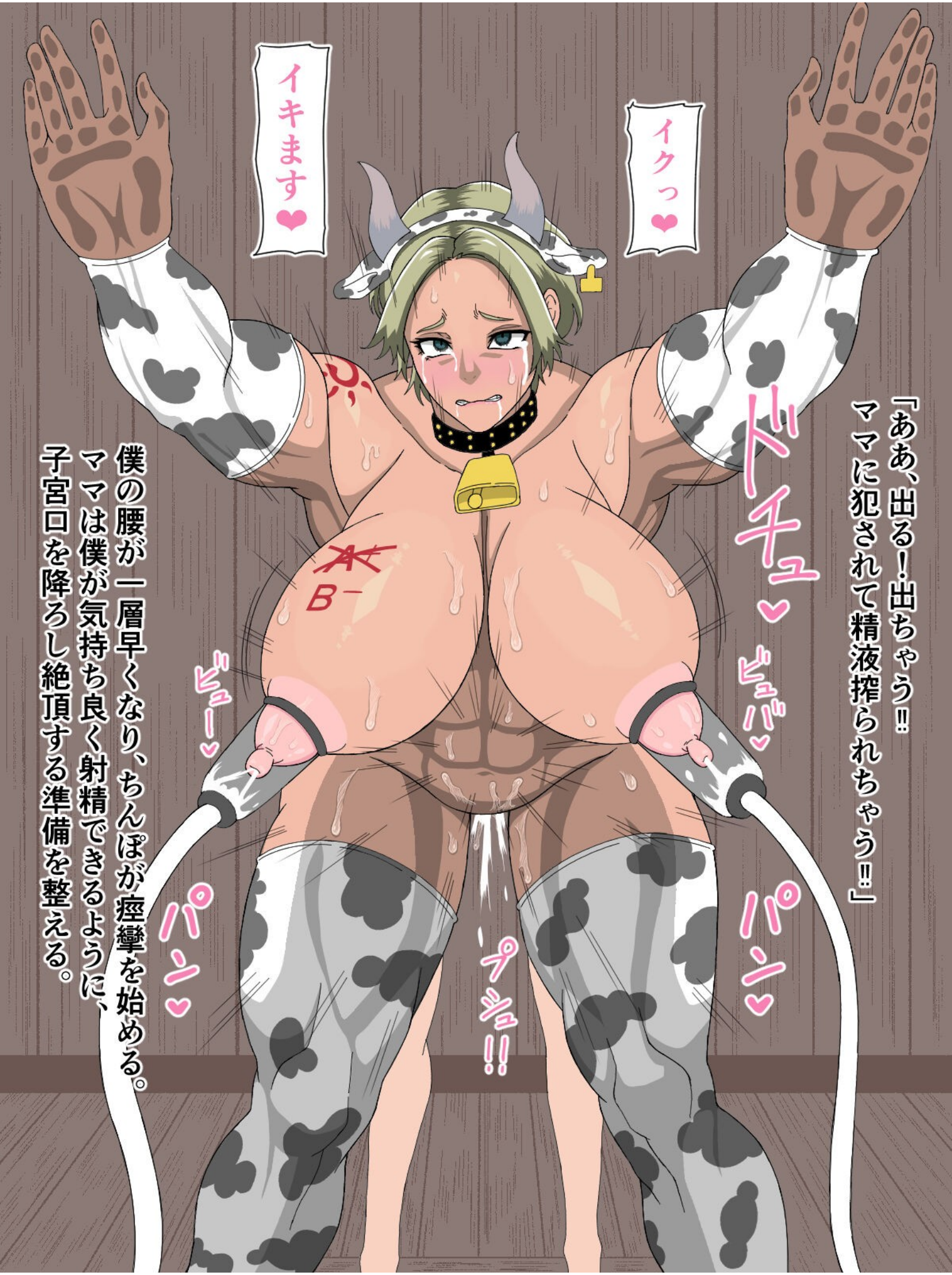

ごっ・・・
ごめんなさい
「ママ！マンコ緩んできてるよ！
自分だけ気持ち良くならないでね！」
ママは素直に謝るとマン圧を強めた。
僕の機嫌を損ねた時のお仕置きを怖がっているからだ。
前のお仕置きでは肉体を改造して母乳が出るようにした。
次はどこを改造しようかな～。
ビュル♡
ビュル♡
パン♡
パン♡


はぁ❤
はぁ❤
ママは必死に僕のちんぽを気持ち良くしようと、
マン圧を強めるが、今日10発以上射精した
僕のちんぽにはあまり刺激が足りない。
ビュル♡
ビュル♡
パン♡
パン♡
「ねえママ～、もっと真面目にやってよ～
ババアだからってこのまんこは
流石に酷すぎるよ～」


うぅ❤
フーッ❤
ママは荒い息を上げながらさらに必死になる。
でもさっきとあんまり変わらないので、
僕は段々イライラしてきた。
「ママいい加減にしてね！
おまんこサボってるとママ捨てちゃうからね！
ママより若くて美人でおっぱい大きい
女の人の所に行っちゃうよ！」
ビュル
ビュル
パン❤
パン❤


はぁ❤
はぁ❤
僕がそう言うとママは血相を変えて懇願してきた。
「いや…！いやぁ…！捨てないでぇ！
もっとおまんこ頑張るし、もっと気持ち良くするからぁ！」
ビュル♡
パン♡
ビュル♡
パン♡
「でも無理なのぉ！母乳吸われながらだと、
上手くおまんこ出来ないぃ！」
泣きながら言い訳するママを見て、自分より年上の女性を
性的に屈服させる快感に僕は震えた。


「しょうがないなあ‼」
まあママのおっぱいは改造しまくって敏感だからね。
こんなバ バアの手抜きまんこに射精するのは癪だけど、
今回は大目に見てやるかと、荒々しくちんぽをしごく。
ママは母乳を噴きながら自分勝手に喘いでいた。
あぁ❤
もっとぉ❤
ドチュ❤
ビュバ❤
ビュー❤
パン❤
プシュ!!
パン❤


「ああ、出る！出ちゃう!!
ママに犯されて精液搾られちゃう!!」
僕の腰が一層早くなり、ちんぽが痙攣を始める。
ママは僕が気持ち良く射精できるように、
子宮口を降ろし絶頂する準備を整える。
イクっ♥
イキます♥
ドチュ♥
ビュバ♥
ビュー♥
パン♥
プシュ!!
パン♥

「出てるぅ！
僕の精液ママのゴミ箱まんこに出てるぅ!!」
ビュル♡
ビュルルルルルル
お♡
おおおおお♡
今日一番の濃い精液がママの子宮に飲み込まれる。
ママは母乳を沢山噴き出しながら快楽に身体を震わせた。
その震えがちんぽを刺激し、射精を更に長いものにさせた。

「全く。許すのは今回だけだからね！
ほら！呆けてないで母乳パイズリして！」
ハァ♥
ハァ♥
ボタ♥
ボタ♥
「うん、するぅ♥
するから…ママのおまんこずっと使ってね♥」

こうして僕はミノさんを完全に女として堕とし、
ママにすることに成功した。
こんな事が出来たのも、全部ジイちゃんの道具のおかげだ。
しかも道具はまだ色々種類があり、これらをママに使って
あげるのが楽しみでしょうがない
でもその反面、ミノママにだけ性欲を消費するのが
勿体ないと感じている自分がいる・・・。
だってこの道具達があれば、どんな女でも僕のママに出来るのだ。
それなら色んな女たちを味見して僕に相応しいママを揃えたい・・・。
あとは単純にミノママの身体に飽きてきたから、別の女で味変したいしね。
次はどんな女をママにしようかな？